



* 0037351000 *

0037351-000

366.6-L54ウ

労働組合論

レーニン・著

永美書房

再版

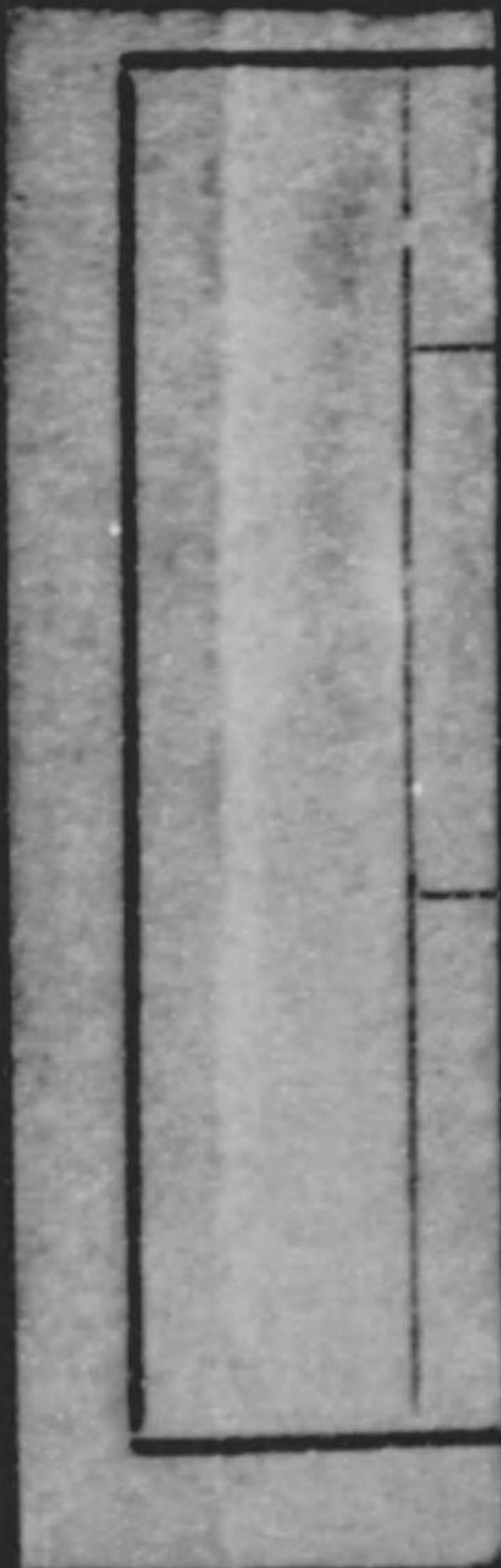
昭和21

AGF

勞働組合論

366.6

L54

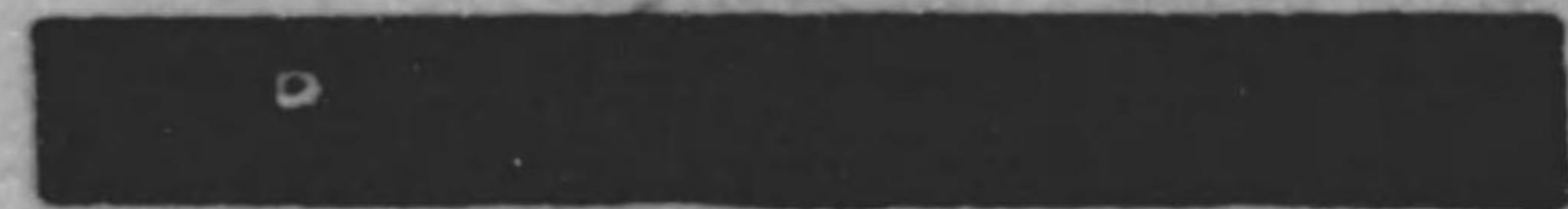


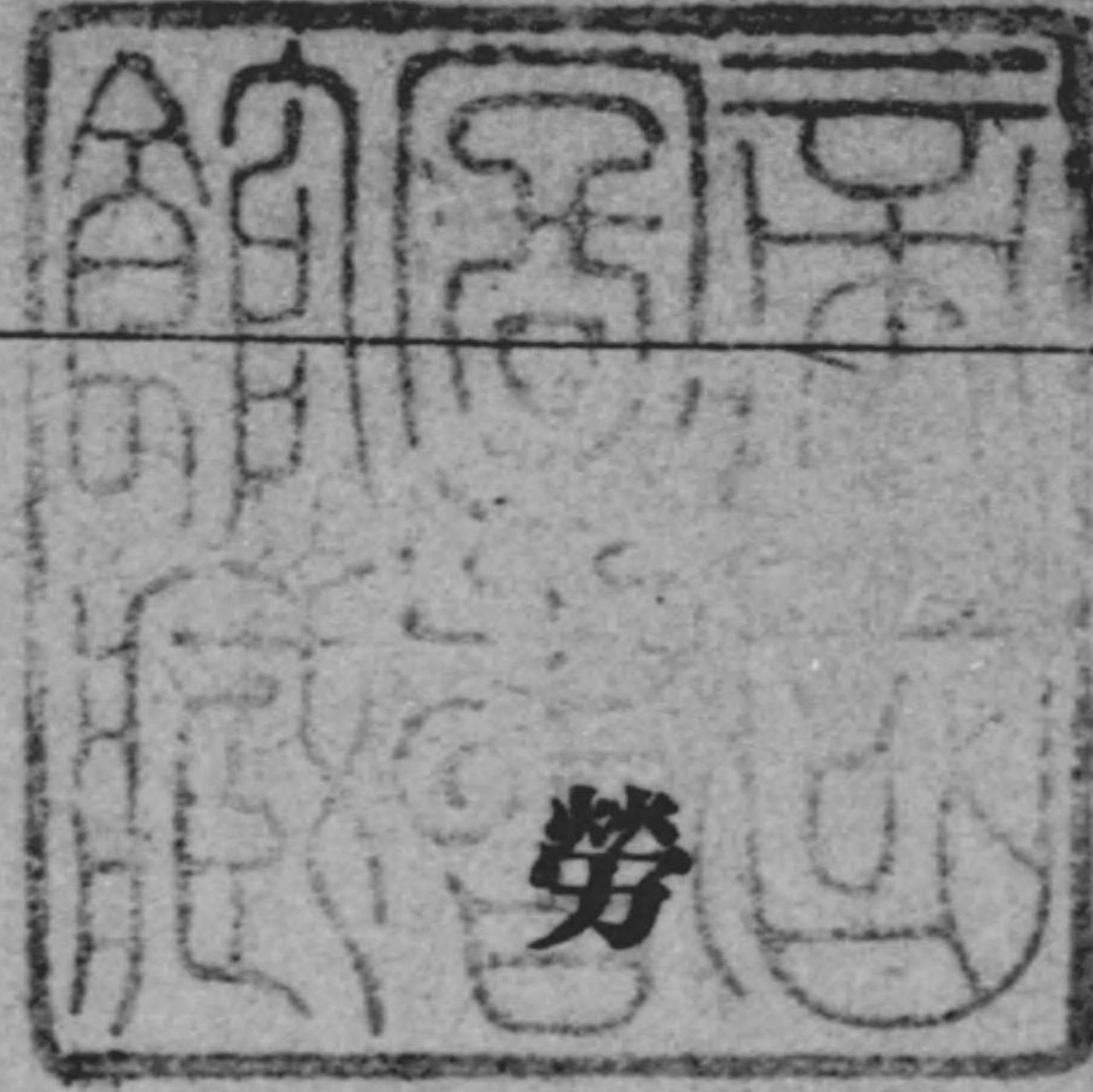


レニソ著
關東地方労働組合協議會譯



永美書房刊





366.6
L54

レ
1
ニ
ン
著
關東地方労働組合協議會譯

勞

働

組

合

論



永
美
書
房
刊



1012
350

序 書

労働組合運動に関するレーニンの見解を學ぶに當つては、吾々は就中レーニンがしばしば繰り返した「眞理は具體的である」といふ考へに留意しなければならない。勿論労働組合運動についてのレーニンの根本的思想は、全時代に、萬國に妥當する。だが同時に看過してはならないことは、個々の觀察や或る種また他の種の議論は、レーニンの場合しばしば二度と繰り返さない具體的・狀況によつて規定されたことである。レーニンは決して、マルクス學のあらゆる機械化、公式化に對する闘争をたたかふことを止めなかつた。レーニン學自體の同じやうな公式化の危険も存在し、繰り返えし示された。この集録本を手にする人々はそれ故、レーニンの定式を單純に暗誦し、その理由づけを機械的に學んではいけない。彼は、労働者階級の天才的指導者が生活し活動したところの具體的・歴史的・狀況を顧慮して、これやかれやを考へ抜かなければならない。レーニンの學說、特に労働組合について述べてゐるものは、渾一である。個々の命題やテーゼは、彼の綜合概念と關連してのみ理解され得る。それ故、レーニンの労働組合運動に関する見解をほんとうに知らうとするならば、個々の命題を手當り次第に取り出してはならない、吾々はむしろ全理論の立場から考へ抜かなければならない。

労働組合の役割に關するレーニンの見解は、一方労働組合に關するマルクスの學說によつて規定され、他方帝國主義時代についての彼自身の解剖により、社會主義革命、プロレタリア革命、プロレタリアート獨裁の勝利の前と後における黨の役割に關する彼の學說によつて規定される。大綱みにいつて、この見解は次のやうである。

一、労働組合は、労働者大衆が資本家に對する日常闘争の實踐においてその階級意識を育て上げて行く小學校である。労働組合は、プロレタリアートをブルジョアジーに階級として對立せしめるところの、資本主義時代における歴史的に生れたプロレタリアートの初歩的階級組織である。

二、労働組合は、黨よりはより低度な階級結合の組織である。けれどもその役割はたいへんである。何故といふのに、それはプロレタリアートの黨と階級の最も廣汎な大衆とを結びつける傳導帶であるからである。

三、労働組合運動における二つの偏向に對し、容赦なき闘争をなすことが必要である。

第一の偏向は結局するところ、労働者運動における自然生長性の要素を過重評價し、經濟的闘争と政治的闘争とを相互に分離し、プロレタリアートの最高組織形態としての黨の指導的役割を否定し、「階級闘争は政治闘争である」といふマルクス主義の初歩的眞理を忘れるものである。

労働者運動におけるこの偏向の代表者は、主として改良主義者である。種々な國々によつて彼等は種々と議論してはゐるが、彼等の結論は同一である。ロシアにおいて一九〇五年革命前の時代の改良主義の一變種の代表者は、「經濟主義者」であつた。即ち、彼等は労働者階級の任務を經濟的改良の闘争に還元し、黨の戰略戰術を労働者大衆の自然發生的氣分に適合せしめるやう提案したのである。一九〇五年の革命に續いた時代においては、この改良主義は謂はゞ國際化し、メンセヴィーキの形態において労働組合の中立を説き、即ちプロレタリアートの黨の指導的役割を否定して、労働組合独自の政治を要求したのであつた。

この集録本の最初の部分は實に、主としてこの偏向に對する闘争にあてられたのである。レーニン特有の深刻さと明確さとを以て、彼はこの改良主義的偏向を發見してゐるのである。

正さにこの偏向が革命前の時代におけるロシアならびに全世界労働者運動においては最も危険であつたからして、レーニンは彼の主力をこの偏向に對する闘争に集中し、労働組合の巨大な役割、その内部で活動することの必要——これを人々は自明のことと思つてゐる——を擔承することは少なかつた。この理由からして吾々はここに、政治一般ではなくして、唯だ革命的政治を排撃し、それを労働組合主義的經濟闘争を以て代えたところの、經濟主義者を曝露した論文を見るのである。だから吾々はここに、如何にレーニンが素樸な鋭さを以て一方自然生長性の、他方目的意識性の問題を提出し、

且つ労働組合主義のみを以てしては社会主義的意識を生み出し得ないことを強調してゐるかを、見るのである。それ故レーニンはここで全く特別に、階級としてのプロレタリアートの結合の最高形態としての黨の役割を強調してゐるのである。

レーニンの著「何を爲すべきか？」からの抜萃を讀むに當つては、自然生長性と目的意識性についてのレーニンの記述は特定の状況の下で書かれたのであること、従つてマスロフがしたやうに、——彼は、労働組合運動の領域において極左翼的気分と偏向とが強大となつて撞頭して來てゐるときに、その「レーニンの左翼小兒病傍註」において、それが労働者運動における自然生長性の表現であるといつて、労働組合の意義を貶すより他の能を知らなかつた、——彼の觀察を機械的に現在の關係に移してはならないことを、吾々は確言しなければならない。

第二の偏向は、労働者運動における労働組合の役割の過少評價である。この偏向は強大な、視野狭少な、我利的、利己的、小ブルジョア的な、帝國主義的な氣持を有し、帝國主義により買収され腐敗せしめられた労働貴族層（レーニンの形成によつて、つくり出されたのであつた。この偏向は、帝國主義戦争とその後における労働組合指導者の比類なき裏切的政治の一反動であつた。

レーニンは勿論、資本主義から社会主義への過渡期における労働組合の反動的傾向を主張した。けれども彼は熱情的に労働組合からの脱退のあらゆる主張者に反抗し、そしていつた、かゝる政策はヒ

ステリーであり、小ブルジョアの革命家の特徴であつてプロレタリアート前衛の特徴ではない。共産黨が若し労働組合を占領することの困難を恐れて最小抵抗線の道をとるならば、——即ち「全くほやほやな、清淨潔白な、純粹無垢な（そして多くの場合、恐らく甚だ年若な）共産主義者によつて考案された労働者同盟等々」の創説の道をとるならば、共産黨は労働者階級の前衛としてのその役割に値しないであらう、と。

何故レーニンはかくも辛辣に、労働組合からの脱退の主張者に反対したのであるか？ 國際労働者運動の經驗は彼に告げるに、労働組合は歴史的に發生したプロレタリアートの大衆組織であること、舊くからの組織に對抗して——新らしい、人爲的なものを形成しやうといふあらゆる企ては失敗に終り、大衆からの共産主義者の孤立化を招かざるを得ないことを以てしたからである。レーニンは、その日常の苦しみに對するプロレタリアートの闘争への積極的参加によつてのみ、その階級意識に目醒めた部分が既に労働組合的に組織されてゐるところのプロレタリアートの大多數を獲得することを、知つてゐたからである。労働組合を通じて大衆へ——これがレーニンの労働組合運動の領域における主要テーマである。

レーニンが「小兒病」を書いてから、六年以上經過した。この六年間にわたる革命的活動の成功のうちにも、不成功のうちにもレーニンの遺言は完全に證明された。このことについて確信を抱くため

には、唯だ、一九二四年二五年極左翼指導下のドイツの黨の労働組合活動の悼ましい経験を、イギリス共産黨の労働組合活動の積極的成果に對立させて見ればよい。そして最近、共産黨が労働者大衆獲得に成功を収めることが出来たとするならば、その主たる根據の一つは、直接間接労働組合からの脱退を説くあらゆる理論に對するコミンテルンの辛辣強い闘争であつたのである。

最後にレーニンが労働組合からの脱退の主張者にかくも精力的に反對したのは、革命前夜ならびに「社會革命後の日に」における労働組合の偉大なる意義を認めただからであつた。十月前夜と十月直後數ヶ月間における諸経験は、最早この問題について何等の動搖をも許さない。

労働組合論

目次

序言.....一

第一篇 資本主義時代における労働組合.....一

第一章 社会主義と労働者運動.....一

一 労働者運動における自然生長的要素.....一

二 労働者運動における意識的要素.....一

三 眞實の階級意識.....八

四 階級闘争は政治闘争である.....一〇

五 労働組合主義的政治はブルジョア政治である.....三五

六 ストライキ運動における経済と政治との關係.....三六

第二章 黨と労働組合.....三三

一 社会主義黨と無黨革命主義.....三三

二 黨と組合との關係に關するボルセヴィーキの最初の決議……………四三

三 中立の根據について……………四四

四 「中立主義」に對する鬭争——革命的マルクス主義者の初步的任務……………五三

五 革命家は反動的労働組合の内部において活動すべきであるか……………五五

六 労働組合における共產主義者の任務……………六七

第二篇 十月前夜における労働組合問題……………七三

第一章 ロシア農業労働者組合創設の必要について……………七三

第二章 労働者の管理について……………七六

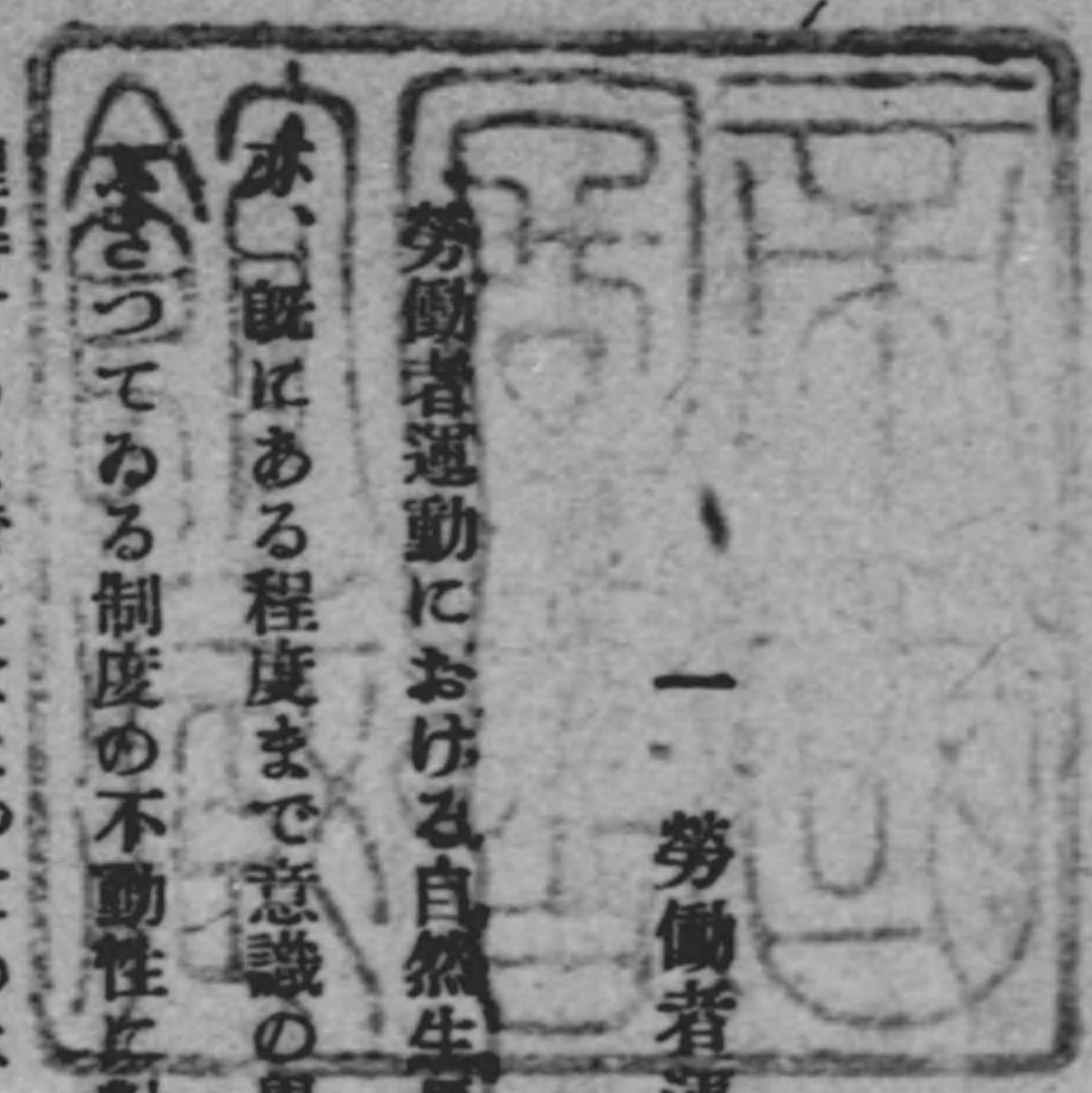
附 録 註……………八二

第一篇 資本主義時代における労働組合

第一章 社會主義と労働者運動

一 労働者運動における自然生長的要素

「何をなすべきか」より



労働者運動における自然生長的要素は、本質上、意識性の萌芽的形態に他ならない。原始的暴動も亦、既にある程度まで意識の覺醒したことを物語るものである。即ち、労働者は自分の上に覆ひかぶつてゐる制度の不動性に對する傳來の信仰を失ひ、……労働者は一個の集合的防禦の必要をまだ理解するまでにはなつてゐないにしても、感じはじめたのであり、かくて彼等は官憲に對する奴隸的服従と決定的に絶縁したのである。だがそれは尙ほ多分に、鬭争といふよりは、絶望と復讐との表現であつた。

九〇年代（註一）のストライキにおいて、吾々は既に意識性をもつと強く閃いてゐるのを見る。即

ち、一定の要求が掲げられ、如何なる時期が最も有利であるかが前以て算定され、他の個所における場合や先例が評定される、等々これである。若し暴動が被抑壓民衆の單なる反抗であるならば、組織的ストライキは既に階級闘争の萌芽たることを現はしてゐる。だが、それは飽くまでも端初的な萌芽である。それ自體では、これ等の闘争は労働組合主義（トレードユニオンズ）的闘争であつて、なほ断じて社會民主主義的闘争ではなかつた。即ち、それは労働者と資本家との敵對關係に對する覺醒を示すものではあるが、しかし労働者は現在の政治的社會的全制度に對しての彼等の利益の不和解的對立の意識を有つてゐなかつたし、亦有つことも出来なかつたのである。これを要するに、労働者はまだ断じて社會民主主義的意識を有たなかつたのである。かゝる意味において九〇年代のストライキは、「暴動」に比すれば、偉大なる進歩であつたにも拘らず、尙純粹に一個の自然發生的運動であつた。

二 労働者運動における意識的要素

……労働者運動における自然生長性に對するあらゆる崇拜と「意識的要素」の役割、即ち社會民主主義の役割に對するあらゆる蔑視とは、同時に、——この役割を蔑視する者が、欲すると否とに全く拘りなく——労働者に對するブルジョア的イデオロギーの強化を意味する。「イデオロギーの過重評價」乃至は意識的要素の役割の誇張、等々を嘆々する者は、労働者が「彼等の運命を指導者の手中から奪取」することが出来さえすれば、純粹の労働者運動はそれ自體のうちから、一個独自の「イデオロギー」を形成することが出来るし、また形成するであらう、と考へてゐるのである。しかしこれこそ大きな誤りである。上來述べ來つたところを補足するために、オーストリア社會民主黨の新綱領草案（一九〇一年）の場合に述べたところの、カール・カウツキー（註二）の極めて適切にして重要な言葉を、吾々はここに引用しやう。

「多くの吾が修正派批評家は、經濟的發展並びに階級闘争が社會主義的生産の前提条件のみならずその必然に對する意識をも亦直接つくり出す、とマルクスが主張したかの如く考へてゐる。そしてこれ等の批評家達は、あらゆる近代的諸國のうち最高の資本主義的發展の國たるイギリスが、この認識を最も缺いてゐるといふ駁論を以て済まし込んでゐる。」

新らしい草案によると、オーストリア綱領起草委員會も亦、右の通りに反駁されたところの自稱「正統派マルクス主義」の立場に同するものと見られる。けだし、曰く「資本主義の發展がプロレタリアートを増大すればするほど、プロレタリアートは資本主義に對する闘争を開始することを餘儀なくされ、益々その資格を獲て來る。彼等は、社會主義の可能性と必然性とに對する意識にまで發展する等々。」

この關係においては、社會主義的意識はプロレタリアートの階級闘争の必然的、直接的成果といふ

ことになつてゐる。これはしかし誤りである。學理としての社會主義はたしかにプロレタリアートの階級闘争とひとしく今日の經濟的諸關係のうち根元を有し、後者とひとしく資本主義の生んだ大衆の貧困と窮迫とから發現する。けれども兩者は、相互的にではなく、平行的に、しかも相異なる前提から生れるものである。近代的社會主義意識は、深い科學的洞察の基礎においてのみ、發生し得る。事實、今日の經濟科學は、今日の技術と同様に、社會主義的生産の一個の前提條件を形成するものである。だがプロレタリアートは如何に熱望しやうとも、そのいづれをも創造することは出来ないのだ。兩者は共に今日の社會過程から發生するものである。しかも、科學の擔當者はプロレタリアートではなくて、ブルジョア智識階級（傍點はカウツキー）である。實にこれ等の階級層に屬する成員のあるものうちに、近代的社會主義も亦生れ、彼等を通じて智識的にすぐれたるプロレタリアートに於て傳えられ、さらにこれ等の人々が、事情の許す限り、プロレタリアートの階級闘争の中へ持ち込んだものである。それ故社會主義的意識は、プロレタリアートの階級闘争の中へ、外部から持ち込まれた何物かであつて、闘争から自然的に生れた何物かではない。

右に應じて、舊ハイムフェルド綱領も亦、全く正當に述べて曰く、社會民主黨の任務はプロレタリアートに彼等の地位と彼等の使命とに對する意識を注入するにある、と。もしかゝる意識が階級闘争からひとりで發生するものならば、かういふ必要はない筈である。新草案は、これ等の章句を舊綱

領からゆづり受け、これを以上に述べた個所に、つき合はせてゐる。かくして、思想的聯属は、完全に寸断されるに到つたのだ。……」（「ノイエ・ツァイト」第二〇卷第一號）

労働者大衆自身によつてその運動の過程において完成される独自のイデオロギイが全然有り得ない（*）とするならば問題は次の一點に歸する。曰く、ブルジョアイデオロギイか、然らずんば社會主義イデオロギイか、と。ここには中間の道はない。（何故といふに、人類は「第三」のイデオロギイは斷じて作り出さなかつたからである。然り、階級對立によつて分裂してゐる社會においては、一般に階級の外に立ち、又はそれを超越したイデオロギイは存在し得ないのである。）ゆゑに、社會主義的イデオロギイに對するあらゆる蔑視、これからのあらゆる絶縁は、同時にブルジョアイデオロギイの強化を意味する。人は自然生長性を主張する。だが、労働者運動の自然成長的發展は、正さにブルジョアイデオロギイの膝下に從屬することとなり、正さに「クレド」（註四）の綱領に準據することになるのだ。けだし自然生長的労働者運動は、労働組合主義であり、労働組合一本主義であり、しかも労働組合主義（註五）は、正さにブルジョアジイが労働者を思想的に奴隷化したことを意味するからである。ここに吾々の任務、即ち社會民主主義者の任務が、自然生長性に對する闘争にある所以であり、さらにまた、ブルジョアジイの翼の下に赴かんとする労働組合主義の自然成長的傾向から労働者運動を引き離し、かくて運動を革命的社會民主主義のために獲得することにある所以

である。

*このことは勿論、労働者がかゝるイデオロギーの形成に毫も参加しないといふのではない。たゞ、彼等は労働者としての資格においてではなく、ブルードンやワイトリングの如く、社会主義の理論家としてこれに参加する。換言すれば、彼等は大小なり當世紀の智識を習得し、さらにこの智識を發展せしめることに成功した場合のみ、またその範囲内でのみ参加するのである。そこで、労働者がしばしばこのことに成功するためには、一般に労働者の意識水準を高めることに全力をつくさねばならぬ。そして、労働者は「労働者用の文献」の如き人爲的に狭められた框の中に閉ぢこもつてゐないで、常に益々一般的文献をもにすることを學ぶ必要があるのだ。むしろ正確には、彼等は「閉ぢこもつてゐる」といふよりも、「閉ぢこめられてゐる」といつた方が當つてゐるであらう。何故といふに、労働者は智識階級のためにも書かれたすべてのものを讀んで居り、且つ讀まんと欲してゐるからである。ただ若干の（たちのよくない）智識階級のみが、工場制度を説明したり、或ひはとづくに知れわたつてゐることを反覆繰り返えすことを以て、「労働者」には充分であると信じてゐるに過ぎないのだ。

ドイツの例を取つて見よう。ドイツ労働者運動におけるラサール（註六）の歴史的功績は、何處に求めらるべきであるか？ それはドイツ労働者運動をそれが（シユルツェ、デーリツツ、註七）その

他の影響の下に、自然發生的にとるに到つた進歩黨的労働組合主義と協同組合主義の軌道から轉換せしめた處に存する。この任務を果さんがためには、自然成長的要素の過少評價、過程としての戰術、要素と境遇との交互作用等々を喋々するよりもあるものが必要であつた。そうするためには自然成長性に對する絶望的な闘争が必要であつたのであり、この永年に亘る闘争の結果はじめて、譬へばベルリンの労働者人口を進歩黨（註八）の支柱から社会民主黨の最もよき牙城へと導くことが出来たのであつた。そしてこの闘争は今日尙ほ終結してはゐない。……今日尙ほドイツ労働者階級は謂はば幾多のイデオロギーに分裂してゐる。即ち、労働者の一部はカソリック教のおよび君主主義的労働組合に組織せられ、他の部分は——イギリス流の労働組合主義を信奉するブルジョアによつて創立せられたヒルシュ・ツンカーの中に、第三の部分は社会民主黨の組合（註九）に組織されてゐる。この最後の組合は、兩餘の如何なるものよりもはるかに多數を包容してゐる。だが、この優越を社会民主黨イデオロギーが捷ち得たのは、ひたすら他のあらゆるイデオロギーに對する執拗な闘争の結果であり、またそれによつてのみこの優越を維持し得てゐるのである。

だが、何故——と讀者は尋ねるであらう——自然生長的運動、即ち最少抵抗線を辿る運動は、結局、ブルジョアイデオロギーの支配といふ結果になるのであるか？ それはブルジョアイデオロギーはその歴史からいへば社会主義的イデオロギーよりは餘程古く、その思想は遂に萬遍なく出来

上つて居り、さらに比較にならぬほど多くの宣傳手段を有つてゐる、といふ簡単な理由からである。そして、社會主義運動が尙ほ新らしければ新らしい程、非社會主義的イデオロギーを固めやうとするすべての企てに對して、一層精力的に闘争しなければならぬし、さらにまた、「意識的要素の過重評價」に反對してわめき立ててゐるよからぬ忠告者達に對して、斷乎として労働者を警戒しなければならぬ。

三 眞實の階級意識

……若しも労働者が恣意と抑壓と暴力と權力濫用との加へられるあらゆる場合に、いかなる階級がかゝる運命に遭遇しやうとも、いきなり奮ひ起ち、しかも、彼等が別の立場からではなく社會主義の立場から、奮ひ起つことに馴らされてゐないならば、労働者階級の意識は眞實の政治的意識ではあり得ないのである。若しも労働者が、具體的な而かも必ずや生き生きとした政治的事實や事件を手にとつて、それぞれの他の諸階級をその智識的・道徳的・生活のあらゆる現はれにおいて觀察することを學びとることが出來ず、また彼等が、人民のあらゆる階級、層、群の全活動および全生活の上に唯物論的分析と唯物論的判斷方法とを實際に適用することを學びとらない限り、労働者大衆の意識は眞實の階級意識たり得ないのである。労働者階級の注意と目標とを専ら、或は單に主としてでも、労働者

階級自身の身の上のみ向ける者は、決して社會民主主義者ではない。何故といふに、労働者階級の自己認識は、現代社會のあらゆる階級の相互關係についての、理論的表象が完全に明瞭であるか否かとばかりでなく——といふよりむしろ多く政治生活の上で練り上げられた表象が完全に明瞭であるか否かと、離れ難く結びつけられてゐるからである。それ故に實際、經濟闘争が、大衆を政治運動に動員する最も廣汎に適用し得る手段であるといふ經濟主義者（註一〇）の説教が甚だしく有害であり、その實際的意義からいへば、甚だしく反動的であることとなるのだ。社會民主主義者たらんがためには、労働者は地主と僧侶、高官と農民、學生と浮浪人などの經濟的本質と社會政治的姿容とに對して明確なる意見を有ち、さらに彼等の長所と短所とを知り、またすべての階級とすべての層とがその利己的傾向やそのほんとうの「内心」を紛飾するために用ふるところの常套語や、あらゆる種類の詭辯を識別しなければならぬ。また労働者は、いかなる機關といかなる法律とがこれやかれやの利益を表現してゐるものであるか、またいかに表現してゐるものであるかを、知らねばならぬ。しかし、かゝる「明瞭な表象」はどういふ書物からも汲みとられるものではない。それは即ち、與えられた瞬間に吾々の周圍に生起するところの出來事や、お互ひに話されさゝやかれるところの出來事や、乃至は或る事件となり或る數字となり或る判決となりその他等々となつて出現するところの出來事の生き生きとした描寫と敏速な曝露とによつてのみ獲得し得るのだ。これ等の全面的な政治的曝露は、

大衆を革命的運動に教育するための基本的条件である……。

四 階級闘争は政治闘争である

ロシア労働者の経済闘争の擴大と強化とは、曝露経済的（工場や職業についての）「文献」の發生と兩々相俟つて進行したといふことを、誰れも知つてゐる。「ピラ」の主要なる内容は、工場制度の曝露であり、そして忽ちにして曝露に對する眞剣な熱情が労働者の間に燃え上つた。社会民主主義者のサークルが、労働者の悲惨な生活や、無際限の酷使や、一切の權利を剝奪されてゐる境涯などについてあらゆる眞實が語られてゐる新しい種類のピラを提供しやうとしてゐるのを、そして提供し得るのを確信するに到るや否や、労働者は工場や製作所から通信を、謂はゞ雨の如くに、送り始めた。この「曝露文獻」はこつびどくやつつけられてゐる工場にばかりでなく、一般に曝露された事實のいくらかでも経験してゐるあらゆる工場に、怖ろしい感動を與えたのである。しかも、各種の工場や職業に従事する労働者の窮乏と悲惨とは多くは共通なものであるから、「労働者生活の真相」を皆んなが熱狂して迎へたのである。「印刷される」といふことは、最も意識の後れた労働者の間にも、眞實の熱情を喚び起こした——それは掠奪と壓迫との上にたてられた今日の全社会制度に對する戦ひの萌芽的形態としての貴い情熱である。そして右の「ピラ」は、多くの場合實際は一個の宣戰布告書にひとしかつ

た。けだし、曝露はおそろしく煽動的效果を及ぼし、労働者の間においては癪にさわつて仕方のない不條理を撤廢せよといふ一般的要求に轉化し、しかもこの要求をストライキにまで發展せしめんとする準備をも呼び起こすにいたつたのである。そして工場主達自身も結局これ等のピラの意義を、宣戰の布告として認めねばならなくなつた。それは、しばしば彼等工場主の側で、宣戰そのものを安閑として待つて居られなくなつたほどである。曝露の場合いつもそうであるやうに、それはその存在だけで既に仕事をなし、それが公表されたといふ事實だけで強い精神的壓力たるの意義を捷ち得た。一枚のピラが現はれただけで、要求の全部或ひはその一部が貫徹した例は、珍らしくなかつた。一言にして盡せば、経済的（諸々の工場をやつつけた）曝露は、経済闘争の重要な槓杆であつたのであり、現にやはりそうである。そして、労働者をして必ずや自助の手段をとるに到らしめるところの資本主義の存在する限り、この意義は變らないであらう。先進ヨーロッパ諸國においては、場末の「工場」や神様すらお忘れになつたやうな「家内工業」の部門などにおける不正の曝露が、階級意識覺醒の出發點、労働組合闘争の開始と社会主義の普及との出發點となつてゐるのを、今尙ほ見受けるのである。ロシア社会民主主義者の大多數は、最近ほとんど皆んな、工場曝露のかゝる組織運動に没頭してつた。いかに彼等がこの仕事に深入りしすぎたか、そしてその結果それ自體としてははまだ社会民主主義的行動ではなく、單に労働組合主義的行動に過ぎないことを彼等が忘れるに到つたかを知るた

めには「ラポーチヤ・ムイスリ」(註一一)を見れば明らかである。諸々の曝露が捉えたのは實際において、専ら或る一定の職業の労働者とその雇主との関係のみにとどまり、そしてその「商品」を少しでも有利に賣りつけ、純粹に商業取引の地盤の上で買手と争ふことを労働力の賣手に教へ得ただけである。これらの曝露は、社會民主主義運動の出発点となり、一構成要素とはなり得た。但し、前衛の組織がそれを適宜に利用することによつて、同時にまた(自然生長性の前に屈服するならば、當然のことなのだ)「労働組合」本主義」的闘争と非社會民主主義的労働者運動へと導くことも出来た。

社會民主主義者(註一二)の指導するのは、ただに労働力の販賣に有利な條件を獲得するための労働階級の闘争ばかりではなく、また、無産者が富者に身を賣らねばならぬやうに出来てゐる社會制度の撤廃のための闘争もさうなのである。社會民主主義者は、單に或る一定の企業者團との関係において労働者階級を代表するのみならず、近代社會のあらゆる階級との関係において、組織された政治的權力としての國家との関係においても労働者階級を代表するものである。それゆゑ、社會民主主義者は經濟闘争のみ自らを局限することが出来ないばかりでなく、經濟的曝露戦の組織が彼等の主たる仕事となることも許されないことは、明らかである。吾々は、積極的に労働者階級の政治教育と彼等の政治意識の發展とに進まねばならない。……

ところで、問題は政治教育とは何ぞやである。労働者階級は、専制主義の敵であるといふ思想のブロバガンダにのみ止まるべきであるか？ 勿論、否である。労働者に對する政治的壓迫を説明するだけでは不十分である。(それはあたかも、労働者の利害と雇主の利害の對立を彼等に説明するだけでは、不十分であるやうに)。かゝる壓迫が具體的に現はれるたびに、煽動しなければならぬ。(あたかも、今日吾々は經濟的壓迫の具體的發現ごとに、煽動を始めてゐるやうに。)そして、この壓迫の下にあらゆる種類の社會階級は呻吟しなければならぬのであるがゆゑに、あらゆる種類の生活と行動との領域に、即ち職業的、一般市民的、個人的、家族的、宗教的、科學的、諸生活と行動との領域に、それが發現するがゆゑに、——若しも吾々が専制主義の全面的政治的曝露の組織に着手しない限り、労働者の政治意識を發達さすべき吾々の任務は充たされないことは、けだし明白なことではないか？ (經濟的煽動を行ふためには、工場内の不正をあげかねばならぬやうに。)

これは、實にわかり切つたことのやうに思へる。ところが丁度この場合實際は、政治意識を全面的に發展させることの必要は、單に言葉の上だけで、「一般に」認められてゐるに過ぎないのである。たとへば「ラポーチエ・デエーロ」(註一三)は、全面的政治的曝露を組織すべき(或は組織のきつかけたるべき)任務につくどころではなく、かへつてこの任務についた「イストラ」(註一四)を後へ引きもどさうと企てたのである。

見よ。

「労働者階級の政治闘争は、單に（断じて單にではない）「經濟闘争の最も發達せる、最も廣汎なる、最も有效なる形態たるに過ぎない。」（「ラボーチエ・デエーロ」の綱領、「ラボーチエ・デエーロ」第一號三頁）

「現在、社會民主主義者の前に課せられてゐる任務は、出來得る限り經濟闘争そのものに政治的性質を賦與するにある。」マルツイノフ（註一五）第一〇號四二頁）

「經濟闘争は、大衆を積極的な政治闘争へ誘引するための最も廣汎に適用さるべき手段である。」（同盟大會（註一六）の決議と補足案「二つの大會」（註一七）一一頁と一七頁）

讀者の見られる如く、これ等のテーゼはすべて、「ラボーチエ・デエーロ」發刊の當初より最近の「編輯局指令」に到るまでを一貫してゐるものであり、そしてそれ等は皆んな政治的煽動と政治的闘争とに對して同一の見解を明瞭に表明してゐるものである。人々はこの見解を、政治的煽動は經濟的煽動に追従せねばならぬといふ、すべての經濟主義者の間に最も勢力のある所説の見地から、検討して見るがいい。果して經濟闘争は一般に、大衆を政治的闘争へ誘導するための「最も廣汎に適用さるべき方法」であるのか？ 断じてそうではない。この「誘導」のために以上に劣らず「廣汎に適用さるべき」手段は、官憲の壓迫や專制的暴壓のありとあらゆる發現であり、經濟闘争と結びついてゐる

現象のみでは絕對にない。なにゆえに、ゼムエキエ・ナツアールニーク（註一八）、「農民の笞刑、官吏の收賄、都會の「平民」に對する官憲の取り扱ひ、飢えたるものに對する迫害と、人民のあらゆる智識欲の抑止、税金の沒義道的取り立て、「異教徒」（註一九）狩り、兵卒の訓練、學生（註二〇）および自由主義的智識階級に對する軍隊式取り扱ひ」、その他數限りなき經濟「闘争」とは直接に結びついてゐないこれ等の壓迫の發現が、なにゆえに、政治的煽動に對し、政治闘争への大衆動員に對して、より少なく、「廣汎に適用さるべき」手段であり誘因であるのか？ 否、正さにその反對なのだ。労働者が無権利、恣意および暴行（自分自身、又は自分に接近してゐるものに對する）のために苦しまなければならぬところのあらゆる生活場面の總和のうちにおいて、労働組合的闘争に對する官憲の抑壓の占むる地位の如きは、疑ひもなくほんの小部分に過ぎないのである。然らば、社會民主主義者にとつて、一般的に云つて、「廣汎に適用さるべき」他の多くの方法があるにも拘らず、單に一つの方法のみを「最も廣汎に適用さるべきもの」などと宣言して、以て政治的煽動の飛躍を前以て制限しやうとするのは、何故であるか？……

……「同盟」は、ユダヤ人労働者同盟（フント）（註二二）の第四回大會の決議のこれに相應する箇所にある「最善の方法」といふ語句を、「最も廣汎に適用さるべき方法」といふ語句に代へたことを以て、意義あるものとしてゐる。以上の二つの決議のうちどちらがよいかは、なかくいひ難い。吾々

の意味では、どちらもより悪いのだ。同盟も「フロント」と同じく、(傳統の影響を受けて、一部分恐らく無意識的にさへ)政治の経済主義的、労働組合主義的解釋へと迷ひ込んでゐる。「最善」といふ文句を借りて來やうと、「最も廣汎に適用さるべき」といふ文句を借りて來やうと、事の本質はいささかも變らないのである。若しも「同盟」が「経済的地盤の上における政治的煽動」が最も廣汎に適用されてゐる(「適用さるべき」ではない)手段であると云つたのならば、それは吾が國社會民主主義運動發展の或る一時期に關しては、正當であつたであらう。即ち、經濟主義者達に關し、一八九八年—一九〇〇年の多くの實際家達(よしその大部分ではなくとも)に關していふのならば、正しかつたであらう。けだし、これ等の經濟主義的實際家達は實際、殆んど専ら經濟的地盤の上で政治的煽動を適用したからである(果して適用したと云ふことが出来るのなら)。かゝる政治的煽動を、すでに見た如く「ラボーチヤヤ・ムイスリ」(註二二)も「自己解放團」(註二三)も、認め且つ推賞すしたのである。經濟的煽動にとつては有效なる事柄でも、政治的闘争にとつては有害なる支障を伴つてゐた、と断定すべきであつたにも拘らず、「ラボーチエ・デーロ」(註二四)は、最も廣汎に適用されてゐる(經濟主義者によつて)手段を最も廣汎に適用さるべき手段であると宣言してゐるのである!

……社會民主主義者の任務は、「經濟闘争そのものに政治的性質を附與する」にあるといふマルツィノフの言葉は、如何なる具體的現實的意義を有つてゐるであらうか? 經濟闘争とは、労働力をより

有利に販賣する諸條件を獲得するために、労働條件と生活條件とを改善するために遂行される、雇主に對する集合的闘争である。この闘争は必ずや、職業的闘争でなければならぬ。何故といふに、労働條件は職業の種類によつてたいへんな相違があり、したがつて右の諸條件を改善するための闘争は各職業毎に行はなければならないからである。(西歐では労働組合によつて、ロシアにおいては臨時の職工同盟や種々なピラ等によつて)従つて「經濟闘争そのものに政治的性質」を賦與するといふことは、「法律上または行政上の手段」によつて、右の職業上の要求、即ち労働條件の職業的改善を實現することである。(マルツィノフが彼の論文のその直ぐ次の頁で云つてゐるやうに)これは正さに、あらゆる職業的労働者組合が現にやつてゐることであり、また常にやつてゐたことであつた。人は、根本的に博學な(そして「根本的に」日和見主義的な)ウエツプ夫妻(註二五)の著作を一瞥して見ることがいい、そうすると次のことがわかるであらう、即ち、イギリスの労働組合は「經濟闘争そのものに政治的性質を賦與する」任務を既に永年認めて來、それを實現してゐるのであり、それはとつてからストライキの自由のために、協同組合的ならびに労働組合的運動に對するありとあらゆる法律的障害の撤廢のために、婦女子保護法のために、衛生法や工場法等によつて労働條件を改善するために、闘争して來てゐるのである。

このやうにして、「おそろしく」懸限にして、且つ革命的に響くこの「經濟闘争そのものに政治的性

質を賦與する」と云ふ物々しい言葉の背後には、ほんとうは、社會民主主義的政治を勞働組合主義的政治にまで貶し去らうといふ傳統的努力がかくされてゐるにすぎないのである。「生活の革命化のには、獨斷の革命化」をもつて來た「イスクラ」の一面性を訂正するといふ口實の下に、彼等は經濟的改良のための闘争を、さも何らか新らしいものでもあるかのやうに、吾々の前に提供する。實際、經濟的改良のための闘争を除外して見ると、「經濟闘争そのものに政治的性質を賦與する」と云ふ言葉のなかには、全くなんにも含まれてゐないのだ。そうして、マルツイノフ自身が、彼の言葉の意義を本當に熟考したのであるならば、この簡単な結論に到達し得た筈であらう。

「吾が黨は」——と彼は「イスクラ」に對して自分の攻城砲を突き出しながら云ふ——「經濟的搾取、饑餓、失業等を防止するための法律上ならびに行政上の方策についての具體的要求を政府につきつけることが出來たし、またそうせねばならなかつた。」「ラボーチエ・デエーロ」第一〇號第四二—四三頁)

「方策についての具體的要求」——これこそは社會改良の要求ではないか！——そこで、吾々はもう一度公平なる讀者に問はう。彼等が「イスクラ」との意見の相違點として、經濟的改良の必要についてのテーゼを掲げる場合、吾々が彼等を覆面せるベルンシュタイン主義者(註二七)と呼んだからと云つて、これがラボーチエ・デエーロ主義者(註二六)(不手際な、耳慣れない言葉を使うのを許して頂き

たい)を誹謗したことになるのであらうか？と。

革命的社會民主主義は、常に、改良のための闘争を彼等の活動の中に含めて來てゐる。だが、彼等が「經濟的」煽動を利用するのは、單に諸種の方策を要求するためだけでなく、さらに(そして何よりも先づ)專制政治撤廢を要求するためなのだ。且つまた、この要求を經濟闘争の地盤においてのみならず、社會政治生活一般のあらゆる現象の地盤において、政府につきつけることを社會民主主義者は自己の任務と考ふるのである。一言にして盡せば、社會民主主義者は改良のための闘争を全運動の一部として、自由と社會主義とのための革命的闘争に、從屬せしめるものである。マルツイノフは段階論(註二八)を別の形で復活させて、政治闘争には謂はゆる經濟的發展行程の先行が無條件的に必要であるとしやうとしてゐる。彼は革命の飛躍期に、改良のための闘争といふ自稱特殊「任務」をもつて現はれ、ために黨を後退させ、「經濟主義的」日和見主義、乃至は「自由主義的日和見主義」に、手をかしてゐるのである。

さらにマルツイノフは「經濟闘争そのものに政治的性質を賦與する」といふ業々しいテーゼの背後に、改良のための闘争を恥づかしげにしよせながら、彼は特別目新らしいもののやうに經濟的のみ(甚しき工場に關するもののみ)改良を主張する。何故彼がそうしたのかを、吾々は知らない。おそらく不注意のためか？だが、若し彼が「工場内の」改良のみを問題にしてゐるのでないならば、

吾々がさきに引用したテーゼは、すっかりその意義を失ふことになる。それとも恐らく、彼が、経済的領域だけでは政府側からの「譲歩」が可能であり、たしからしきがあると考へてゐるからなのか？果して然らば、それはとんでもない誤りである。譲歩は、體刑、旅行券、償還、異教、検閲、等々に關する立法上の領域においても、可能であり、且つ獲得される例もあるのである。「経済的」譲歩（乃至似而非譲歩）は、勿論、政府にとつては一番安あがりであり、また一番都合のよいことでもある。だが正さにそれゆえに、吾々社会民主主義者は、吾々には経済的改良が好ましいのであるとか、吾々は経済的改良を特に重要視してゐるといふが如き見解（または誤解）を、どんなことがあつても斷じて流布してはならないのである。

「かくの如き要求は——とマルツイノフは前掲の立法的ならびに行政的方策についての具體的要求についていふ——單なる空語には決して終らないであらう。といふのは、これ等の要求は掴み得べき効果を約束するが故に、労働者大衆によつて積極的に支持され得るものであるから……」

吾々は経済主義者ではない、おふ、どうして、どうして！ただ、吾々はこういふのだ。即ち、専制主義に對するあらゆる抗議が何等掴み得る成果を絶対に保證しないのであれば、労働者大衆はこの抗議を積極的に支持し得るものではない、（そして、自分が自身の俗物根生で以て、労働者の心を推しはからうとするすべての人々が何んといはうと、嘗つて支持したこともないのである、）と。

「雇主と政府とに對する經濟闘争（政府に對する經濟闘争！）は、それ自身の有する直接の革命的意義の外に、労働者を絶えず彼等の政治的無力の問題に突き當らせるといふ意義を有つてゐる。」（マルツイノフ第四頁）

吾々が右の引用文を抜き書きしたのは、先きに述べたことを繰り返すためではなくて、「雇主および政府に對する労働者の經濟闘争」といふ新奇なすばらしい公式に對して、マルツイノフに吾々の特別の感謝を述べたいがためなのだ。何んと素的であることよ！何んといふたぐひなき天才を以て、經濟主義者間の諸分派におけるあらゆる部分的意見の相違の何んといふ名匠的解消を以て、經濟主義者——「労働者が共通の利益のために、彼等の地位の改善のために行ふ政治闘争へ」と労働者を糾合する云々や、さらには段階論や、「最も廣汎に適用さるべき」についての黨大會の決議等々に到るまで——の全本質が簡潔明瞭な文句で以て述べられてゐるではないか「政府に對する政治闘争」とは、とりもなほさず労働組合主義的政治であつて、それと社会民主主義的政治との間には、うんとうんとかけ隔たりがあるのである……

政治的階級意識は、外部からのみ、即ち經濟闘争の外部から、労働者と雇主との關係の埒外から、労働者に與へられ得るものである。その中からこの意識が汲み取られ得る唯一の領域は、あらゆる

る階級ならびに層の國家および政府に對する關係の領域、即ち全階級間の交互關係の領域なのである。それ故、吾々は労働者に政治的智識をもたらすために何をなすべきであるかと云ふ問題に對しては、多くの場合實際家達が、——經濟主義に傾いてゐる實際家達は申すまでもなく——満足してゐるやうな解答、即ち「労働者の中へ行け」と云ふ解答を與へてはならないのである。労働者に政治的智識をもたらすためには、社會民主主義者は人民のあらゆる階級の内に入り込まねばならず、彼等の軍の支隊をあらゆる方面に派遣しなければならないのである。

吾々がわざとこういふ極端な定義づけをえらび、わざと簡單且つ辛辣に云ひ表はしたのは、逆説を語りたいがためではなく、經濟主義者を彼等が許し難くも等閑に附した諸問題に、即ち彼等がどうしても理解しやうと欲しない組合主義的政治と社會民主主義的政治との區別の問題に突き當らしめんがためである。……

最近著しく普及した如きタイプの社會民主主義者の一サークルをとつて、その仕事を見るがいい。このサークルは「労働者との結びつき」を有ち、それで以て満足し、そしてピラを發行し、それで以て工場内の不正状態や、資本家に組みする政府の偏頗的行爲や、官憲の彈壓等を攻撃してゐる。労働者との集會においては、話しは通常或ひは殆んど、同じ題目を出でない。革命運動史、吾が國政府の内政政策の諸問題、ロシアならびにヨーロッパの經濟的發展、ならびに近代社會におけるこれやあれや

の階級の狀態の問題等々に關する講義や討論はおそろしく稀である。社會の他の諸階級との組織的連絡や、この結合の擴大などについては誰一人として考へない。大抵の場合、かゝるサークルの成員が、實際運動家の理想として描いてゐるものは、社會主義的、政治的指導者よりも、むしろ労働組合の書記である。けだし、任意の、譬へばイギリスの労働組合の書記は、常に労働組合を援けて經濟闘争を行はしめ、工場内の曝露を組織し、ストライキの自由や、ストライキ見張り人設置の自由を制限する法律規則の不當を追求し、ブルジョア階級に屬してゐる仲裁裁判官の不公平を曝露する、等々。これを要するに、労働組合の書記は誰でも、「雇主と政府とに對する經濟闘争」の指導者であり援助者である、だが、このことは、未だ社會民主主義ではないといふこと、社會民主主義者の理想は労働組合の書記であるべきではなくて、あらゆる恣意彈壓の發現に對して——それがどこに起らうと、また如何なる階級、如何なる層に對してなされやうとも——よく糾弾し得る、あらゆるこれ等の現象を官憲の壓迫と資本主義的搾取との一つの綜合圖の中に統一し得る、どんな些事でも利用して以て全世界に自己の社會主義的確信と自己の民主主義的要求（註二九）とを説き、萬人に對してプロレタリアート解放戰の世界史的意義を明らかにし得るところの、護民官でなくてはならぬといふことは、いくら強調しても尙ほ足りない位である。譬へば、ロバート・ナイト（最も有力なイギリス労働組合の一つである鍋釜工組合の有名な書記であり、指導者である）とウイイルヘルム・リーブクネヒトとを比較して

見よ、そして、マルツイノフが「イスクラ」との間に意見の相違を藏してゐるところの對立をこの兩者にあてはめて見よ。しからば諸君は、こういふことを知るであらう。——吾々は、マルツイノフの論文をめぐりながら議論を進めて行かう。——即ち、ロバート・ナイトは著しく「大衆を或る具體的行動に喚び寄せた」に反し、ウイルヘルム・リーブクネヒトは「すべての現制度、或ひはその部分的現象に對する革命的解明」により多く携つた。ロバート・ナイトは「プロレタリアートの最も手近かな要求を完成化し、その實現の手段を指示した」に反し、リーブクネヒトはこのことをも勿論行つたが、さらに同時に色々の反政府的層の積極的活動を指導することを忽にしなかつた。ロバート・ナイトは特に「經濟闘争そのもの出來得る限り政治的性質を賦與する」ことに努め、そして「政府に對して、或る掴み得る成果を約束してゐる具體的な要求を提出する」ことを見事にやつてのけたのに反し、リーブクネヒトは、むしろ「一面的『曝露』」に携つた。ロバート・ナイトは「灰色の日常闘争の發展」に大きな意義をもたせたが、リーブクネヒトは「輝ける、完成せる思想の宣傳」に大きな意義をもたせた。リーブクネヒトは彼の指導する新聞を「現制度、とりわけあらゆる種類の人民層の利益と衝突する政治制度を曝露する革命的反對黨の機關紙」としたのに反し、ロバート・ナイトは「プロレタリアの闘争との密接なる有機的結合のもとに労働者のことのために働らき」——若しも、「密接なる有機的結合」なる意味を先に吾々がクリチエフスキーとマルツイノフを例にとつて究明したや

みな、自然成長性に屈する意味に解するならばだ——そして、「自己の行動範圍を制限した。けだし、マルツイノフとひとしく彼は、「それによつて自己の行動を複雑化した」と無論信じたに相違ないからである。これを要するに、諸君が知らるゝ如く、マルツイノフは實際社會民主主義を労働組合主義にまで貶して了つた。しかし、それも彼が決して社會民主主義の幸福を望まなかつたがためではなくて、單に彼がブレハーノ（註三〇）を理解する代りにブレハーノフを深めやうと少しあせりすぎたといふ簡單な理由からである。……

五 労働組合主義的政治はブルジョア政治である

「何をなすべきか」第三章より

…大衆運動の自然成長性へのあらゆる屈服、ならびに社會民主主義政治の労働組合主義的政治へのあらゆる貶下は、正さに、労働者運動をブルジョア民主主義の道具に變形するための地盤を作ると同じである。自然成長的労働運動はそれ自體からは、單に労働組合主義のみを作り出すものであり、（そして、不可避的に作り出した。）労働者階級の労働組合主義的政治は、正に、労働者階級のブルジョア政治なのだ。政治闘争への労働者階級の参加は、政治革命への参加すらもが、この政治をなほなかに社會民主主義的政治たらしめないのである。

六 ストライキ運動における経済と政治との關聯

「経済的ストライキと政治的ストライキ」より

一九〇五年以來、商工省發表のストライキ統計は、づつと経済的ストライキと政治的ストライキとの區別を設けてゐる。この區別はストライキ運動の特殊の形態を生み出したところの現實そのものが、これを必要とせしめたのである。経済的ストライキと政治的ストライキとの結合、これが右の特殊性の主要様相の一つである。現在ストライキ運動の復活に際して、労働者がロシアのストライキ運動のかゝる特殊性に全注意を向けることは、運動のために利益であり、事件に對し意識的態度をとるといふ立場からも利益である。

吾々は先づ、政府のストライキ統計から若干の基本的數字をあげて見やう。一九〇五年から一九〇七年にいたる三ヶ年の期間に、ロシアにおけるストライキ運動は、世界が未だ會つて経験したことのないほどの高潮に達した。しかも、政府の統計は單に製造工場および製作所だけなので、鑛業、鑛道、建築業、其他賃銀労働者の多數の諸部門は、これに加算されてゐない。だが、その製造工場および製作所だけですら、一九〇五年には二八六萬三〇〇〇人、即ちほとんど三〇〇萬人に近い労働者がストライキし、さらに一九〇六年には一一〇萬八〇〇〇人が、一九〇七年には七四萬人がストライキ

した。一八九四年より一九〇八年に到るこの一五年間において——この期間はヨーロッパ諸國において初めて系統的なストライキ統計が作られ初めた時であるが——アメリカにおけるストライキ参加人員の一ヶ年の最高數字は、六八萬人に過ぎなかつたのである。

それ故に、吾々が一九〇五年乃至一九〇七年の間に経験した如き大衆的ストライキを、世界で最初に戦つたのは、ロシアの労働者であつた。今日イギリスの労働者は、経済的ストライキの領域において、新らしく力強い躍進をとげてゐる。けれどもロシア労働者の指導的役割は、彼等が西歐の労働者よりも若干より強力であり、より組織的であり、より發展してゐるといふ點にその説明は求められるべきではなくて、むしろヨーロッパにはプロレタリアート大衆が獨立的に参加する全國的大危機がまだ勃發しなかつたといふ點に求められるべきである。かゝる危機が一旦到來するや、ヨーロッパの大衆的ストライキは一九〇五年のロシアよりも尙ほ巨大であるであらう。

さて、この時期において、経済的ストライキと政治的ストライキとはどういふ關係にあつたか？ 政府の統計はこの點につき次の解答を與ふる。

ストライキ件數 (單位千)

(一九〇五年)

(一九〇六年)

(一九〇七年)

経済的ストライキ

一、四三九

四五八

二〇〇

政治的ストライキ
總計

一、四二四
二、八六三

六五〇
一、一〇八

五四〇
七四〇

右の數字は二種のストライキの間における密接不可分の關係を物語つてゐるのである。即ち、運動の最高期（一九〇五年）の特徴は、闘争が極めて廣汎な經濟的地盤を有つてゐたことである。換言すれば政治的ストライキは同年においては、經濟的ストライキの確乎たる地盤の上に立つてゐたのだ。参加人員の數は、政治的ストライキにおけるよりも經濟的ストライキにおいて多數であつた。

一九〇六年ならびに一九〇七年における運動の沈滞に相應するものは、經濟基礎の衰退であつた。經濟的ストライキの参加人員數は、一九〇六年にはストライキ總人員數の一〇分の四に、一九〇七年は一〇分の三に減少した。されば、政治的ストライキと經濟的ストライキとは相互に助け合ひ、一方の闘争形態は他方の力の源泉となつてゐる。これ等二種のストライキの密接な結合なしには、眞に廣汎な大衆運動、全國民的意義を有する運動は不可能である。運動の發端にあつては、しばしば經濟的ストライキは、おくれたる大衆を呼びさましめ、揺り動かし、運動を一般化し、これをより高い段階に進める力があるものである。

そこで譬へば、吾々は一九〇五年第一四半季においては、經濟的ストライキが政治的ストライキに著しく優つてゐるのを見る。即ち、經濟的ストライキに六〇萬四〇〇〇人の参加者があつたに對し、

政治的ストライキはたつた二〇萬六〇〇〇人である。一九〇五年の第四四半季においては、この關係は逆轉した。即ち、經濟的ストライキ四三萬人に對し、政治的ストライキに八四萬七〇〇〇人の参加者があつた。このことは、運動の當初に當つては多くの労働者が經濟闘争を前面に押し出したのに、最高の飛躍期においてはその逆が安當したことを物語る。けれども經濟的ストライキと政治的ストライキとの結合は、全期間を通じて見られた。この結合なしには、吾々は今一度繰り返えすが、眞に偉大な、高い目的を實現する運動は不可能である。

労働者階級は、政治的ストライキにおいては全國民の指導階級として登場する。プロレタリアートはこの場合、ブルジョア社會における諸々の階級中の一つとしての役割ではなく、制覇者の、換言すれば指導者、嚮導者、前衛の役割を演ずるのである。運動に顯現される政治的理念は、全國民的性質をとる。即ち、それは全國民政治生活の基本的な、最も決定的な諸條件に觸れるのである。政治的ストライキのこの性質は、一九〇五年から一九〇七年に到る時代に關するすべての科學的研究が確言してゐるが如く、あらゆる階級の關心、就中いふまでもなく最も廣汎多數にして最も民主主義的な人層、即ち農民階級その他の關心を運動に向つて喚び起こしたのであつた。

他方、勤勞大衆は、經濟的要求なく直接即刻彼の地位が改善されることなくして、一國の一般的「進歩」なるものを考ふることは、承知しないものである。労働するものの經濟的狀態もまた改善さ

れるといふので、大衆は運動に引き込まれ、精力的にそれに参加し、高くそれを評價し、英雄的行動と自己犠牲と、偉大なる事業に對する歸依等とを發揮するのである。「平常」な場合の労働者の生活條件は信ぜられないほど劣悪であるから、事態はそうならざるを得ないのだ。生活條件の改善のための闘争において、労働者階級は道徳的にも智識的にも、且つまた政治的にも飛躍的に高まつて、さらに彼等の偉大なる解放の目的を實現するより多くの能力をもつに到るのである。

商工省發表のストライキ統計は完全に、一般的活躍期における労働者の經濟闘争の右の如き大なる意義を證明してゐる。労働者の強襲が大なれば大なるほど、彼等の生活状態の向上に關し彼等の收穫は益々大である。「社會の同情」もまた生活條件の改善も、昂揚せる闘争の結果である。自由主義者が（また清算主義者（註三二）が）労働者に向つて、諸君が「社會」の同情を勝ち得るとき諸君は強いといはうならば、マルキスト（註三二）はいふ、諸君が強いからして諸君は「社會」の同情を得るのである、と。ここに社會とは、ありとあらゆる民主主義的人口層のことであつて、即ち、小ブルジョアジー、農民、労働者、生活に接觸してゐる智識階級、使用人等々である。

ストライキ運動は、一九〇五年において最も強大であつた。そしてそのとき示されたものは何んであつたか？ 正さにこの年に労働者は彼等の生活状態の改善に關し最大の成果を勝ち得たこと、これである。政府の統計の示すところによると、一九〇五年のストライキ一〇〇〇件のうち最小の成果をも

達成せずして、換言すれば完全に惨敗したものは二九件だけである。一〇年間（一八九五年から一九〇四年まで）においては、ストライキ一〇〇〇件に對し五二件は全然成果を見ることなくして已んだ！それ故、運動の大衆的性質は闘争の成功率を高め、ほとんど二倍にした。

運動が衰ふると共に、だがまた、成功的闘争もより稀れになつた、即ち、一九〇六年にはストライキ一〇〇〇件のうち三三件は些かも得ることなくして闘争を打ち切つた、若しくはより正確には、それは惨敗した。一九〇七年には一〇〇〇件中五八件であり、一九〇八年には一〇〇〇件中六六件にすら及んだ。

かくて數年にわたる統計の科學的資料は、經濟的ストライキと政治的ストライキとの結合の必要についての、眞に廣汎にして且つ全國民的なる運動におけるかゝる結合の不可避性についてのあらゆる階級意識ある労働者自らの經驗と觀察とを、完全に證明してゐる。

現在のストライキの波は、この結論の正さを餘すところなく證明してゐる。一九一一年においてストライキ参加者は一九一〇年に比しほとんど倍加した。（五萬人に對する一〇萬人。）にも拘らずこの數字の意義は極めて少であつた。純粹な經濟的ストライキは、比較的「狹隘な」まだ全國民的意義を有たぬ事件に止つた。これに反し、現在萬人すべてに明かなることは、有名な四月事件（註三三）以後今年のストライキ運動は、まさにかゝる意義を勝ち得るに到つたことである。

第二章 黨と労働組合

一 社會主義黨と無黨革命主義

「ノワヤ・ジズニ」第二二號、二七號

(一九〇五年一月二六日、一月二日)より

急速に次から次へと新らしい人口層を捉えて行つたロシアにおける革命運動は、黨に所屬せざる多數の組織を發生せしめるに到つた。團結の要求は、それがより永年彈壓され迫害されるに程、それだけ益々強力な力を以て押し出やうとするものだ。あれやこれやの、屢々定つた形も有たない如き、組織がひつきりなしに生れた。そして彼等の性質は恐ろしく獨特なものであつた。ヨーロッパの諸組織の有する如きキチンとした限界は見られない。労働組合的團體が政治的性質を帯びてゐる。政治闘争は經濟闘争と融合し——譬へばストライキの形態において——以て混合型の一時的若くは多かれ少なかれ永續的な團體を作り上げた。

この現象は何を意味するのか？ 社會主義黨はこれに對し如何なる態度をとるべきであるか？ 嚴密なる意味の黨は、高度に發展した階級闘争の隨伴現象であり成果である。逆にまた、公然且つ

廣汎な階級闘争のためには、嚴密なる意味の黨の發展が必要である。されば階級意識あるプロレタリアートの黨、社會主義黨が、不斷に無黨主義とたたかひ、その根本原則によつて鞏められた一體たる社會主義労働者黨の建設のために斷乎として努力するのは絶対に正しいのである。この努力は、資本主義の發展が全人民を諸階級に分裂せしめること益々甚しく、彼等相互の對立が益々激化すればするほど、大衆の間にその成功を收めること益々大である。

ロシアにおける現在の革命が多くの黨に所屬せざる團體を作つたし、また尙ほも作りつつあることは、容易に理解出来ることである。この革命は一個の民主主義革命である、即ちその社會的經濟的内容から云へば一個のブルジョア革命である。この革命は絶対封建制度を倒し、以てブルジョア制度のために自由な道を開き、かくしてブルジョア社會のあらゆる階級の要求を實現する。この意味において、それは一個の一般的國民革命である。このことは勿論吾々の革命は決して階級革命ではないといふのではない。儘かにそうではない。それが打倒せんとするのは、ブルジョア社會の立場から見て既に老朽し、この社會と縁遠くなり、その發展をさまたぐる階級や族籍カステである。だが國の全經濟生活が既にあらゆるその基本的特徴においてブルジョア化されてゐるのであり、人口の巨大な大衆が實際は既に資本主義的生活條件の下にすんでゐるのであるから、反革命的な要素は數にして見れば勿論あるかないか位小數で、それは「國民」に比較すればほんに「一と握り」にすぎないのである。それゆ

え、ブルジョア革命の階級的性質は不可避的に、絶対主義ならびに封建主義に對するブルジョア社會の凡ゆる鬭争といふ全國民的な、一見非階級的性質のうちに現はれざるを得ないのである。

ブルジョア革命の時代は、ロシアにおいては他の諸國におけると等しく、資本主義社會の階級矛盾の比較的未發達といふことがその特色である。勿論ロシアにおいて資本主義は一七八九年のフランスは申すに及ばず、一八四八年のドイツよりも著しく高い發達段階にある。しかしながら些かも疑を容れないことは、純粹な資本主義的矛盾は吾が國においては未だ著しく「文化」とアジア主義との、ヨーロッパ主義と韃靼主義との、資本主義と封建主義との矛盾によつて隠蔽されてゐることである。かくして前面に押し出されるものは、その實現が資本主義を發展せしめ、それを封建主義の殘滓から洗ひ清め、プロレタリアートに對し、またブルジョアジーに對し生活條件鬭争條件を改善せしめるが如き要求なのである。

實際今日ロシアの各工場、各役所、各聯隊、各衛兵室、各教區、各學校等々で何千回となく起草されてゐる要求書や諸願書やドレアンセ（註三四）を見るならば、吾々は直ちにその壓倒的大多數が純粹の「文化要求」——こゝにいふ表現が許されるならば——たることを見るであらう。そこで私がいひたいのは、こゝにいふのはもと特殊な階級的要求ではいささかもなく初步的な法的性質の要求にすぎないこと、即ち資本主義を破壊するためではなく、反對にそれをヨーロッパ主義の埒内に編入し、

それを野蠻、粗野、腐敗その他の「ロシア的」農奴制遺制から解放する要求なのである。根本的にいてプロレタリアートの諸要求もまた多くの場合、資本主義の埒内にて全く實現可能な改良に限られてゐる。ロシアのプロレタリアートが今日即刻要求してゐるものは、資本主義を葬むるものではなく、それを清め、その發展を急がし、強めるものなのだ。

儘かに資本主義社會におけるプロレタリアートの獨自な立場は、労働者の社會主義への努力を、社會主義黨とのその同盟を、既に運動の最も最初の段階から自然生長的な力を以て、表面に押し出して來るものなのだ。だが本來の社會主義的要求はまだ將來のことで、日程に現はれるものは政治上では民主主義的諸要求、經濟上では資本主義の埒内にての經濟的諸要求である。プロレタリアートすら革命を最大限綱領においてではなく、謂はゞ最少限綱領の埒内で遂行してゐるので、謂んや農民階級、この凡ゆる壓迫されてゐる諸階級中最も數的に老大である階級についてはいふを待たないのである。彼等の「最大限綱領」、彼等の究極目標は、資本主義の限界を超えず、資本主義は全部の土地を全農民と全民衆とへ譲り渡すことによつて、もつと廣く且つ豊かに發展するであらう。農民革命は今日一個のブルジョア革命である——この言葉がどんなに吾が小ブルジョア社會主義のセンチメンタルな騎士たちのセンチメンタルな耳に「侮蔑的に」響かうとも。

現在進行しつつある革命の上來述べた如き性質から、黨に所屬せざる諸團體が出現することは全く



當然のことなのである。外見的無黨主義の様相、無黨主義の外見が、それゆえに運動全體を色どるところになる——だがもちろん外見上だけではあるが。「人間的」文化的生活に對する、結社に對する、自己の品位や人權市民権やの保持に對する懇求は、萬人を捉え、全階級を團結せしめ、あらゆる政黨的限界をはるかに飛び超え、黨員に編入されるほどにはまだなかなか高まり得ないが如き人々をも揺り動かす。目の前の初步的に必要な権利や改革が退つびきならないので、謂はゞ高遠な意圖や考慮は後方へ押しやられることになる。目前進行しつゝある闘争の過重評價——必然尤もな過重評價であり、こゝろいふものがなくしては闘争に捷つことは不可能ではあらうが——は、不可避免的にこの手近かな初步的目的を理想化し、それをバラ色に彩り、進んではそれを幻想的な衣にくるみ勝ちなものである。單純な民主主義、ブルジョア的な通俗民主主義が社會主義と考へられ、社會主義として登録される。全世界が謂はば「無黨」であり、全世界が唯だ一つの解放的（實際全ブルジョア社會を解放する）運動に巻き込まれ、全世界が「社會主義」の全く和やかな色彩を帯びることになる。特に民主主義運動における社會主義的プロレタリアートの指導的役割のゆえにそうなるのである。

無黨主義の思想が、かゝる状態のもとにおいて一時的捷利を占めることは不可避である。無黨主義は強制通用力を以て流行スローガンとなる。けだし流行といふものはそれ自身は無力でいつも現實生活の後をついて行かざるを得ないものであるから。そして政界の「最流行」現象は、正さに無黨圖

體、即ち無黨民主主義、無黨ストライキ主義、無黨革命主義であるやうに見える。

ところで問題となるのは、この無黨主義の事實、この無黨主義の思想に對し、種々なる階級の味方と代表者とは如何なる態度をとらなければならぬか——主觀的な意味においてはなく、客觀的な意味において、如何なる行動をとらなければならぬか、即ち自分自身がこれに對しどう行動すべきかといふのではなく、種々なる階級の利益と立場とからしてこの事實に對して如何なる態度が不可避的に生れて來なければならぬか、である。

無黨主義は吾々が既に指摘したやうに、吾々の革命のブルジョアの性質の所産或ひはその表現である。ブルジョアジーは無黨主義以外のものに賛成することは出來ない。けだし、ブルジョア社會の自由のために闘争しつゝあるものの間に黨が缺如してゐることは、このブルジョア社會自體に對する新しい闘争が未だ發生してゐないことを意味するからである。自由のために「無黨的」闘争を行ふものは、この自由のブルジョアの性質を把握しないものか、またはこのブルジョア制度を神聖化するものか、またはそれに対する闘争を延期し、その完成を無限のかなたにまで延期するものか、何れかである。そしてこれと反對に、意識的にか無意識的にかブルジョア制度の立場に立つものは、無黨主義の思想に引きつけられざるを得ないのである。

階級分裂を基礎とする社會においては、相敵對する階級間の闘争はその發展の一定段階において不可避免的に政治的闘争にならざるを得ない。諸階級の政治闘争の最も完成した、最も纏まつた、且つ最も明確な表現は、黨の闘争である。無黨主義とは、黨の闘争に對する無關心の謂ひである。だがこの無關心たるや中立と闘争の抑制と同意語ではない、けだし階級闘争においては決して中立といふことは有り得ず、吾々は資本主義社會において生産物や勞働力の交換に参加することを「抑制する」ことは出来ないからである。交換はだが不可避免的に經濟闘争を生み出し、ついではまた政治闘争をも生み出す。それゆゑ闘争に對する無關心とは、實際においては決して闘争からの隔在抑制または中立の謂ひではない。無關心とは、強いもの、支配權をもつてゐるものの暗黙的支持である。その顛覆前、十月革命中、專制主義に對しロシアで無關心であつたもの、彼は暗黙のうちに專制主義を支持したのである。今日のヨーロッパにおいて、ブルジョアジーの支配に對し無關心であるものは、暗黙のうちにブルジョアジーを支持するものである。自由のための闘争はブルジョアの性質のものだと刻印づけることに無關心なものは、この闘争におけるブルジョアジーの支配を、正さに發生せんとする自由なロシアにおけるブルジョアジーの支配を暗黙のうちに支持するものである。政治的無關心とは、政治的飽滿のことである。無關心な態度を一片のパンに對してとるものは、飽き足つてゐる者のみである。饑えたるものはしかし一片のパンの問題においても常に「黨を作る」であらう。一片のパンに對する

「無關心、無頓着」は、當人がパンを必要としないことを意味するのではなく、この男は絶えずパンを充分與えられて居り、パンの不足を一度も感ぜず、彼は飽滿者の「黨」において充分手當して貰つてゐることを意味するのである。無黨主義とはブルジョア社會においては、飽滿者の黨、支配者の黨、搾取者の黨へ所屬してゐることの偽善的、假裝的、消極的表現にすぎない。黨に所屬せざるものはブルジョア的思想であり、黨に所屬するのは社會主義的思想である。この原則は、大體において、あらゆるブルジョア社會に適用される。たしかに、人々はこの一般的眞理を個々の特殊問題や特殊な場合に適用することは知つてゐるに相違ない。だが、ブルジョア社會全體が封建主義と絶對主義とに敵對して立ち上つてゐる時にこの眞理を忘れるのは、實際において、ブルジョア社會の社會主義的批判の完全なる放棄を意味するものである……

社會主義者が超黨派的團體に加入することは、許さるべきであるか？ 若し許さるとせば、如何なる條件のもとにおいてであるか？ 如何なる戰術を吾々はかゝる團體においてとるべきであらうか？ 第一問に對して、吾々は無條件的原則的否定を以て答ふるわけには行かない。社會主義者が黨に所屬せざる（即ち、多かれ少なかれ意識的若くは無意識的なブルジョアの）團體へ参加することは、如何なる場合でも、また如何なる條件のもとにおいても許されないといふとそれは間違であらう。民主主義革命の時代において、特定の場合に黨外諸團體へ参加することを放棄することは、民主主義革命

への参加を放棄すると同意義となるであらう。だが些も疑を容れざることは、社会主義者はこの「特定の場合」を狭く限界しなければならぬこと、かゝる参加をば全く特定の制限的條件の下においてのみ許容し得ることである。何故といふのに、黨に所屬せざる諸團體は既に述べたやうに、階級闘争の比較的未發達から生れるものだからであり、他方嚴密な政黨分裂は、階級闘争を意識的な明瞭な一定の原則的闘争にするための條件の一つであるからである。

プロレタリア黨の原理的政治的獨立性の保持は、社会主義の絶えず變らざる無條件的義務である。この義務を履行しないものは、彼の「社会主義的」(言葉の上の社会主義的)信念が如何に純粹無垢であらうとも、彼は實際において、社会主義者たることを已めたものである。黨外團體への加入は、社会主義者にとつては唯だ例外としてのみ許される。この参加自體の目標ならびにその性質、その條件等は、餘すところなく基本的任務に従屬しなければならぬ、即ち社会主義革命の意識的指導のための社会主義プロレタリアートの準備と組織といふ基本的任務に。

事情は吾々を驅つて、黨外諸團體へ参加することを餘儀なくせしめることがある、特にプロレタリアートが優れた役割を演ずる民主主義革命の時代においてはそうである。かゝる参加は譬へば、ボーンヤリと民主主義的見解を抱いてゐる聴衆の前に社会主義を宣傳するといふ利益や、反革命に對する社会主義者と革命的民主主義者との共同闘争といふ利益においては、必要であることが示される。第一

の場合においては、かゝる参加は吾々自身の意圖の勝利を助ける一手段たり得るであらう。第二の場合においては、特定の革命的目的を達成するための一個の戰闘協定たり得るであらう。二つの場合とも、参加は單に一時的なものたるにすぎない。二つの場合とも参加が許されるのは唯だ、労働者黨の獨立性が完全に保證され、黨外團體またはソヴェートに「選出され」たる個人またはグループが、全黨による無條件的統制と指導とに従ふ場合のみである。

吾が黨が秘密に活動してゐる限り、かゝる統制と指導とを果して行くことは、怖るべきしほ／＼ほとんど越ゆべからざる障害に出會はしたのであつた。黨の活動が益々公然となつて來た現在においては、吾々はこの統制と指導とを最も廣汎に實現することが出來、また實現すべきである、そしてただに「幹部」のみでなく、黨の最下層に至るまで、黨に所屬してゐる全組織労働者にまで無條件的に實現すべきである。黨に所屬せざる組合またはソヴェートに於ける社会民主主義者の活動についての報告、かゝる活動の條件と任務とについての報告、かゝる活動に基因する各種黨機關の決議は、無條件的に労働者黨の實踐のうちに編入されなければならない。黨全體のかゝる眞實の参加、この種萬般の行動統制への参加こそ實に、一般民主主義的行動に對し眞の社会主義的行動を對立せしめるものである。

吾々は黨に所屬せざる諸團體において、如何なる戦術をとるべきであらうか？ 第一に獨立な結び

つきを作るために、また吾々の全社會主義綱領を宣傳するために、凡ゆる可能性を利用することである。第二に、民主主義的變革の完全且つ斷乎たる實現といふ立場から最も手近かな政治的任務を規定し、民主主義革命における政治的スローガンを與へ、闘争的革命的民主主義が小賣商人的自由主義的民主主義と異なり實現しなければならぬ改革の「綱領」を掲げることである。

吾々がこういふ方法で事に當つた場合にのみ始めて、吾が黨員が今日は労働者により、明日は農民により、また明後日は兵士によりなどして作られるところの無黨革命諸團體へ参加することは、許されるのであり、また効果があるのである。吾々がかく行動して始めて、吾々はブルジョア革命における労働者黨の二重的任務に善處し得る状態となるのである。ここで二重的任務とは即ち、民主主義的變革を最後まで徹底せしめること、且つ社會主義プロレタリアート、即ち自由を資本の支配顛覆のためのその無慈悲的闘争に役立たしめるところのこのプロレタリアートの前衛團を擴大鞏固にすること、これである。

二 黨と組合との關係に關するボルセヴィーキの最初の決議

一、社會民主黨は常に經濟闘争をプロレタリアートの階級闘争の一組成分子として見做す。

二、凡ゆる資本主義國における經驗がこれを示してゐる如く、經濟闘争遂行のための労働者階級の

最も合目的な團體は、廣汎な労働組合である。

三、現在ロシア労働者大衆の内部には、労働組合的團結の強い傾向が現はれてゐる。

四、労働者大衆の地位の永續的改善のためとその本當の階級的組織を鞏固にするためとの經濟闘争は、この經濟闘争とプロレタリアートの政治闘争との正しい結合の條件の下においてのみ達成され得る。

以上の諸理由を以て、

吾々は次の意見に一致し、大會に次の如く決議することを提案する。

一、凡ゆる黨機關は、黨外労働組合の創立を促進し、黨に組織されてゐる當該職業の代表者をそれに参加さすやうに努力すべきである。

二、黨は出來得る限り、組合に組織されてゐる労働者をプロレタリアートの階級闘争と社會主義的任務との精神に教育しあげ、以て黨はその活動によつてこの組合内に指導的地位を勝ち取り、この組合を一定の前提の下においては結局黨に公然加入せしめ——といつて非黨員を追ひ出すのではなく——るやうに、努力しなければならない。

三 中立の根據について

……社会主義黨と労働組合との關係についてこの決議は、重大な意義を有つてゐる。スツットガルト大會（註三五）の決議は、カウツキーが正當に觀察して居るやうに、またこの決議を讀んだあらゆる人々が自分でも確信し得るやうに、「中立」の原則的承認の問題について終に決定的斷案を下した。中立若しくは無黨主義については、決議中一語も含まれてゐない。反對に、労働組合と社会主義黨との密接な結合の必要、この結合を鞏固にすることの必要が充分決定的に認められてゐる。

中立の原則は、スツットガルト大會において、ドイツの代議員の半數、しかもその労働組合の代表者が日和見主義的立場を最も決定的に代表したので、その有害な方面を曝露した。中立に關する宣傳はドイツにおいては實際、危険な結果を示した、即ち、それは社会民主黨内の日和見主義に手助けしてやつたからである。こういう事實は今後清算されなければならない、殊にプロレタリアートに労働組合運動の中立を推賞するところのプロレタリアートのブルジョア民主主義的忠告者がウヨ／＼してゐるロシアにおいては、そうである。

一般にスツットガルト大會は、多數の最も重要な問題において、國際社会民主黨内の日和見主義派と革命主義派とを明確に對立せしめ、且つこれらの諸問題を革命的マルクス主義の意味において解決

した。この大會の決議——討論によつて解明されたが——は、あらゆる宣傳家煽動家の必携物でなければならぬ。スツットガルトにおいて達成された仕事は、萬國プロレタリアートの戰術の統一と革命的闘争の統一との點において、一大前進を來さしめた。

吾々の全黨は今や、労働組合における仕事は中立の意味においてでなく、労働組合と社会民主黨との出來得る限り密接なる接近の意味において、行はなければならないことを承認する。また、労働組合の黨的性質はひとえに社会民主主義者の労働組合内部における活動によつてのみ達成され得ること、社会民主主義者は労働組合内に鞏固な細胞を作らなければならないこと、さらに合法的労働組合の建設が不可能なところにおいては非合法的組合を作らなければならないことを、承認する。

スツットガルト大會の決議は、カウツキーがライブチツヒ労働者に對する彼の報告に於て述べてゐるやうに、中立の原則的承認の問題を決定的に片づけた。階級對立の前進的發展、最近あらゆる國々におけるその尖鋭化、ドイツにおける永年の經驗——ドイツでは中立の政策は、特別なキリスト教的自由主義的組合の擡頭を些かもさまたげなかつたばかりでなく、労働組合内における日和見主義を強めた——労働組合と政黨との共同一致の前進を要求してゐるプロレタリア闘争の特別領域の擴大（西歐におけるプロレタリア革命の將來可能な形態の雛型としてのロシア革命に於ける大衆ストライキと革命運動）、凡てこれらのことは中立理論からその根柢を掃ひ去るものであつた。

プロレタリア黨の内部においては、現在中立の問題は何等特別大きな論争を惹き起こしそうには見えない。吾が國の社會革命黨（註三六）の如き種類の非プロレタリア的、似而非社會主義的黨派の場合にはこれと異なる、この社會革命黨は實際は「智識階級と進歩的農民のブルジョア革命的黨派の最左翼」を代表するものである。

甚だ特色のある事柄は、スツットガルト以後中立の思想を吾々の間では社會革命黨とブレハーノフ（註三七）のみが擁護してゐることである。而かもその擁護たる甚だ不手際に……

ブレハーノフは、労働組合の中立はドイツの修正主義者（註三九）によつて擁護されてゐるといふルナチャルスキー（註三八）の指示をひつばつて来て、これに答えて曰く、

「修正主義者は、労働組合は中立でなければならぬといふ、そして以て正統派社會主義に對する闘争に労働組合を利用することを知つてゐるのである。」

そしてブレハーノフは結んで曰く、

「労働組合の中立を止揚してもこの場合何の役にも立たない。吾々が労働組合を黨と密接な形式上の從屬關係においたとしてすら、黨内にはだが修正主義の「イデオロギー」が勝利したとするならば労働組合の中立の止揚は「マルクス批評家」の新しい捷利を意味するに過ぎないであらう。」

この議論はブレハーノフの好んで行ふ方法、即ち問題を回避し、論争の本質を抹殺する模範例である。黨内に事實修正主義者のイデオロギーが捷利を占めたのであれば、それは正さに労働者階級の社會主義黨たることを已めるであらう。それゆゑ、かゝる黨派が発生すること、如何なる闘争と如何なる分裂とがその場合生ずるかは、全然問題ではないのだ。問題は、凡ゆる資本主義諸國において社會主義黨と労働組合とが存在することであり、吾々の任務は兩者の基本的關係を規定することである。ブルジョア階級の階級利益は、不可避的に、労働組合を現存秩序の地盤の上におけるちつづけな狭い活動に限り、それを社會主義とのあらゆる結合から遠ざけやうとする努力を生むものである、そして中立理論はこういふブルジョアの努力のイデオロギー的なところである。社會民主黨内における修正主義者は資本主義社會では、いつもこういふ風にやつて行かうとするものだ。

確かに、政黨的、また労働組合的労働者運動の當初においては、ヨーロッパにおいて労働組合の中立に吾々は味方することが出来た、即ちプロレタリアートの闘争が比較的未發達であり、ブルジョア階級の労働組合に對する組織的働き掛けが缺けてゐる頃には、この闘争の本來的地盤を擴大する一段としてである。今日國際社會民主黨の立場からして労働組合の中立に味方することは、全く當を得てゐない。ブレハーノフの「マルクスもまた今日ドイツにおいて労働組合中立の味方たるであらう」といふ保證を、唯だ吾々は笑つて讀めばいい、かゝる議論がマルクスの説明全體と彼の學說の全精神

とを無視して、マルクスからの一片の「引用」を一面的に解釋した結果の上に立つてゐるものである以上、特にそうである。

「私は中立に賛成する、即ち、ベーベル（註四〇）がそれを理解した如き意味においてであつて、修正主義的意味においてはなく」とブレハーノフは書いてゐる。こゝにいふことをいふのは、ベーベルにかけて誓つて、而かも泥濘を匍匐することなのだ。疑ひもなくベーベルは國際的プロレタリア運動において優れた權威者であり、練達した實際的指導者であり、革命的闘争のための要求に最も純な感情をもつた社會主義者であるからして、百中九九までは譬ひ踏み間違えたとしても自分で泥濘から出る道を發見し、彼に従ふ事を欲するものをも引き連れて抜け出る事は出来るであらう。ベーベルは、プレスロウにおいて（一八九五年）ヴォルマル（註四一）と提携して修正派の農業綱領を擁護したとき、間違つた。彼は、エツセンにおいて防禦戦争と攻撃戦争との原則的差異を主張したとき、間違つた。彼は、労働組合の「中立」を原則にまで高めたとき、間違つた。吾々は喜んで信ずる、若しブレハーノフがベーベルのお伴をしてのみ泥濘を匍匐するのであるなら、そうじばく踏み迷ふことなく、よし踏み迷つたとしても長い時間ではないであらうことを。にも拘らず吾々は、ベーベルが間違つた丁度その點で彼の眞似はすべきではない、と思つてゐる。

人はいふ——そしてブレハーノフは特にこれを強調する——、中立はその物質的地位が改善せられ

ねばならないといふ考にまで到達した凡ゆる労働者を組織するために必要だ、と。だがこゝにいふことをいふものは、階級闘争發展の今日の段階は絶対不可避免的に、この改善を資本主義の埒内において如何にして獲得するかといふ問題においてさへ「政治的相違」を生み出さずにはおかないものであることを、忘れるものである。労働組合中立の理論は、労働組合と革命的社會民主黨との密接なる結合の必要をとく理論と違つて、不可避免的に、この改善のためにプロレタリアートの階級闘争を鈍らすやうな手段を選らばしめるものである。これについての最もわかり易い例は、（序でにいへば、近代労働者運動の最も興味ある話の評価と關連して）、ブレハーノフがその中で中立を擁護した「ソウレメニー・ミル」（註四二）の同じ輯である。この中に吾々はブレハーノフと相並んで、有名なイギリスの鐵道従業員指導者にして、労働者と會社理事との紛争を妥協を以て終結せしめたところのリヒヤード・ベルの讚美者としての、E・P氏を見るのである。ベルは、「全鐵道従業員運動の精神」と名づけられてゐる。

「何等の疑も有り得ないことは」とE・Pは書いてゐる、「ベルは彼の落ちついた、思慮深い、首尾一貫した戰術で以て鐵道従業員の無條件的信頼を勝ち得たのであつて、その組合員は躊躇なく何處まででも彼について行く用意をしてゐる。」

こゝにいふ立場は決して偶然ではない。それは、本質上、プロレタリアートの解放のために役立つで

あらうところの闘争のためにはなく、その地位の改善のために労働者を結合することを以て最上案と考へてゐる中立主義と結びついてゐる。

だがこの立場は、イギリス社会主義者の見解とは一寸も一致してゐない、イギリスの社会主義者は、ベルの賞讃者が同一雑誌において有名なメンゼヴィーキ・ブレハーノフやジョルダンスキー一味と矛盾することもなく書いてゐることを知つたならば、恐らく驚嘆することであらう。

イギリスの社会民主主義紙「ヂャステイス」は、ベルと鐵道會社との妥協を機として一月六日のその社説に書いて曰く、

「ほとんど凡ての労働組合がこの謂ゆる平和條約を排撃したが、この點において吾々は完全に一致してゐる。……こういう條約は労働組合からその存在の凡ゆる意義をなくするものである。……こういう背理的な協定は労働者を拘束することは出来ない、彼等は充分それを拒否せんとするであらう。」

そして十一月二三日の次の號において、ベルネットは「また賣る」と題する論文のうちに書いて曰く、

「三週間前までは、鐵道従業員聯合組合はイギリス中で最も有力な労働組合であつた。今それは一個の共濟團體の水準にまで墮落した。……そしてこういう飛躍が行はれたのは、鐵道従業員が

闘争し、そして惨敗したからではなく、その指導者が故意にか、または無智からか戦はない前に既に資本家に彼等を賣り渡したからである。」

そして同紙の編輯部は附言していふ、「ミッドランド鐵道會社の一賃銀奴隷」から同様の寄書があつた、と。

それともそれは一個の「遣り過ぎ」で、「餘りに革命的すぎた」社会民主主義であつたためか？否である。未だ一度も「社会主義」を稱したことのない穏和な「獨立労働黨」(I.L.P.)の機關紙たる「レバー・リーダー」は十一月五日號において、全資本家新聞(急進派の「レイノルド新聞」から保守黨の「タイムス」に到るまで)がベルに浴せかけた諷刺の答へとして、ベルの作つた協定は「労働組合史に嘗つて現はれた最も輕蔑すべきもの」であるとし、且つリヒヤード・ベルを労働組合運動の「バゼン元帥」(註四三)と名づけた一組織鐵道従業員の手紙を載せてゐる。他の一鐵道従業員は、「労働者に七年間勞役の判決を下したこの惡意ある協定のゆえに、ベルの責任を問はなければならぬ」ことを要求してゐる。そしてこの穩健な新聞の編輯部は、同紙同號の社説において、この妥協を「イギリス労働組合運動のセダン」と呼んでゐる。「國民的規模において組織された労働の威力を示威するに、これほどの好機會は嘗つてなかつたのである。」労働者の間には、「嘗つて見ざる程の情熱」と戰闘意志が支配してゐた。社説は結びとして、労働者の窮乏と饑寒準備中のロイド・ジョージ(註四四)

(資本家の従僕たる役割を演じた一大臣)とベルの凱旋との咬みつくやうな対立をもつて來てゐる。最も極端な日和見主義者たるフェビアン協會——一個の純粹な智識階級の團體——員(註四五)だけが、この協定に賛意を表し、フェビアンに好意を有つてゐる雜誌「ニュー・エーヂ」をすら耻しさのために眞赤にせしめた程である。この「ニュー・エーヂ」は、保守黨ブルジョアの「タイムズ」はたしかにフェビアン協會中央委員會の當該宣言を全文掲載したことは事實だが、こゝにいふ先生達を除いては「唯つた一つの社會主義的團體も、唯つた一つの労働組合も、唯つた一つの有名な労働者の指導者も、」妥協に賛成を表明しなかつたことを、認めなければならなかつた。これは、ブレハーノフの協働者E・P氏によつて示された、中立の適用の一模範例である。「政治的相違」は問題とならず、與えられた社會における労働者の地位の改善が問題となつてゐる。闘争の放棄と資本の前への無條件的降伏の代償を拂つての改善に味方したものは、イギリスの全ブルジョアジとフェビアン協會員とE・P氏であり、労働者の集合的闘争の味方は——凡ゆる社會主義者と労働組合の労働者とであつた。ブレハーノフはそれでも尙ほ續けて今日も、中立を説教し、労働組合と社會主義黨との密接なる協同行動に賛成しないであらうか？

四 中立主義に對する闘争——革命的マルク

ス主義者の初歩的任務

「スイス社會民主黨内におけるチンメルワルド
左翼の任務」(一九一七年)より

……労働者階級、使用人等の經濟的團體の「中立」理論との決定的斷交。戦争によつて特に明瞭に證明さるゝに到つた眞理、即ち、謂ふところの「中立」とはブルジョアの偽善であり、偽善であること、それは事實においてはブルジョアジと特に帝國主義戦争の如き彼等の下賤な營みとに對する受動的降伏を意味するといふ眞理についての大衆の啓蒙。労働者階級または小ブルジョアジ乃至使用人の最下層の凡ゆる團體内における社會民主主義的活動の強化、凡ゆるこれらの組合内における特別な社會民主主義的グループの形成、凡ゆるこれ等の組合内で革命的社會民主主義が大多數を占め、指導權を握るやうな状態への組織的努力。この條件が革命的闘争のためには特に重要だといふことについての大衆の啓蒙。

五 革命家は反動的労働組合の内部において

活動すべきであるか？

「共產主義左翼小兒病」より、一九二〇年

ドイツの「左翼」にいはせると、この問題に對する無條件的な否定的解答は既定の事實である。彼等の意見によれば、「反動的」「反革命的」労働組合に對する弾劾と怒號とだけで、黄色な、社會愛國主義的、協調的、レギエンの(註四六)反革命的労働組合内における革命家の活動、共產主義者の活動が不必要であり、且つ許容出来ないものでさへあることを證明するには、充分なのである。

だが、ドイツの「左翼」がこの戦術の革命的であることを如何ほど確信してゐやうとも實際においてそれは根本的に間違であり、カラ文句以外の何物をも含まない。

このことを明かにするために、私は私の経験から始めやう。——これは、ボルセヴィーキの歴史と現在の戦術との中で一般に適用出来るもの、一般的意義があり、一般的に妥當するものを西歐に適用しやうといふ目的を有つた、この論文の一般的計畫に則ることでもある。

指導者——黨——階級——大衆の交互關係、従つてまたプロレタリアートとその黨との獨裁が労働組合に對する關係は、吾が國では現在次の如き具體的形態をとるに到つた。即ち、獨裁はソヴェートに組織されたプロレタリアートを通じて實現せられ、このプロレタリアートは最近黨大會(一九二〇年四月)の報告によれば黨員六一萬一〇〇〇人を數ふるボルシェヴィーキの共產黨によつて指導せられてゐる。黨員の數は十月革命以前と同じくその後も動搖甚しく、以前は、一九一八年や一九一九年においてすら著しく少なかつた。吾々は黨が餘りに膨脹しすぎることを恐れる、けだし政府黨となる

とどうしても射殺にしか値しない様な野心家や詐欺漢がまぎれ込まうとするからである。

最近吾々が黨の門戸を廣く開放したのは——唯だ労働者と農民のためにのみであり——またユーデニツク(註四七)がベテルスブルグから數露里のところまで、そしてデニキン(註四八)はオレル(モスクワから三五〇露里の距離)にまで進軍して來たとき(一九一九年の冬)、即ち、ソヴェート共和國が怖るべき、致命的な危険におびやかされ、共產黨に加入したところで投機者や野心家、詐欺漢その他一般無節操漢にとり決して有利な立身出世の見込を與えなかつた(寧ろ絞首臺や拷問の見込)ときであつた。毎年黨大會を招集する(最近は黨員一〇〇〇〇人に對し一代議員の割合)黨は、黨大會によつて選出される一九名の成員からなる中央委員會によつて指導される。さらに常務はモスクワにおいてもつと狭い範圍の同志によつて、即ち、それぞれ五名の中央委員から成り、中央委員總會によつて選出されたる謂ゆる「組織局」ならびに「政治局」によつて執行される。従つてここに一個の純粹な「寡頭政治」が生れる。重要な政治的若しくは組織的問題の唯一つとして、黨中央委員會の指導的訓令なくしては、吾が共和國の如何なる政府機關によつても決定されないものである。

黨はその活動に際して直接労働組合によつて支持されてゐる。労働組合は現在、最近大會(一九二〇年四月)の報告によると、成員四〇〇萬人以上を數え、且つ形式上は黨と關係がない。實際は無數な組合やとりわけ勿論全露労働組合中央部または事務局(全露労働組合中央評議會)やのあらゆる指

導機關は、共產黨員から成り、彼等は黨のあらゆる指令を實現してゐる。ここからして、全體としては形式上共產黨に所屬してゐない、彈力的な、比較的廣汎な、甚だ強力なプロレタリアートの機關が生れることになり、これを通じて黨は階級ならびに大衆と密接に結びつき、これを通じて黨の指導の下に、階級の獨裁が實現されるのである。労働組合との密接な連絡なくして、その熱心な支持なくして、唯だに經濟的建設のみならずまた軍事建設においても、その犠牲的活動なくして、國を支配し獨裁を實現する——こういふことは二年は愚か、たつた二ヶ月ですらも勿論決して吾々に出來なかつたであらう。この密接な連絡が實際においては甚だ複雑且つ多岐に亘つた活動を意味したことは、いふまでもない。即ち、宣傳、煽動、労働組合の指導的役員とばかりでなく一般に勢力のある役員との適時且つ頻繁な協議、今日尙ほ少數ではあるが一定数の追隨者を有し、彼等をけしかけてありとあらゆる反革命的所業——（ブルジョア）民主主義のイデオロギーの擁護、労働組合の獨立（プロレタリア國家權力からの獨立）の宣傳から始めてプロレタリア的規律のサボタージュその他に到るまで——に誘はんとするメンセヴィーキに對する決定的闘争、これである。

吾々は大衆との結合は労働組合だけを通じてでは、不充分であると考へる。實踐は吾々が國において革命の進行中、黨外の労働者協議會や農民協議會といふ機關を生み出した。この機關を吾々は出來得る限り支持し、發展せしめ、擴大せしめ以て、その助けによつて大衆の氣分を追求し、彼等に近づき

彼等が問題としてゐる問題に答え、彼等のうちから國政に當る有能な役員を選抜するのである。國政監督人民委員會の「労働者農民監察局」への轉化についての最近の指令の一つにおいて、この種の黨外協議會に各種檢閲のため國政監督員を選出するの權能が賦與せられた。

さらに、いふまでもなく、黨の全活動は勤勞大衆をその職業に差別するところなく包含してゐるソヴェートを通じて執行される。ソヴェートの郡大會は、ブルジョア世界の最もすぐれた民主主義共和國においても嘗つて見られなかつた如き民主的機關であつて、この大會（これを黨は出來る限り注意深く目にとめて居る）を通じて、また階級意識を有する労働者を農村におけるあらゆる職務に當らせるために絶えず派遣することによつて、都市労働者の獨裁、富裕な、ブルジョア的な、搾取し投機する農民階級に對する組織的闘争等が實現されるのである。

以上が「上」から見た、獨裁の實際的具體化といふ見地から見た、プロレタリア國家權力の一般的機構である。讀者は望むらくは次のことがおわかりになつたであらう。即ち、この機構に習熟し、この機構が過去二五年間に小さな、非合法的な、地下的サークルから生長して來た次第を見て來てゐるボルセヴィーキにとつては、「上」からだとか「下」からだとか、指導者の獨裁かそれとも大衆の獨裁か等々のあらゆる言説は、云つて見れば人間には左足と右手と何れが有用かといふ論争とひとしく、笑ふべき、小兒じみた囁語にしか思えないこと、これである。

同様笑ふべき、小兒じみた囁語と吾々には思はれざるを得ないのは、ドイツ「左翼」の次の如き題目についての業々しい、驚くべく博學にしてまた恐るべく革命的なお饒舌である。曰く、共産主義者は反動的労働組合の内部で活動することは出来ず、また活動してはならない、曰く、かゝる活動を放棄するは許さるべきである、曰く、人はかゝる労働組合を去つて、無條件的に、全く新らしい、きれいな「労働者同盟」を創立しなければならぬ、等々。

資本主義が社会主義に遺産として残すものは必ずや、一方では古い、數世紀かかつて出来上るに到つた、労働者間の職業的・手工的差別であり、他方では次の如き労働組合である。即ちこの労働組合たる、甚だ徐々に、永い永い年數を経て、より廣汎な、同業組合的色彩のより少ない組合、即ち産業別組合（全産業を包容し、工場別、手工業別、職業別などによらない）にまで發展することが出来るのであり、また發展するであらう、そうして以て、さらにはこの産業別組合を通じて、労働者内部の分業の排除と、全面的に發展し、全面的な教養を有つた人間、萬事をなし得る人間の教育、訓練、準備とに移り得る可能性が與えられるのである。この方向に共産主義は進み、また進まねばならぬ、そして其處にまで共産主義は到達するであらう、だが、それはづつと永い年月を経て初めてである。この充分發達し、終局的に確立され定形づけられた、充分に發展し成熟せる共産主義の來るべき成果を、今

日、實際に先き取りしやうとするのは、四歳の幼兒に、高等數學を教えんとする試みに相等しい。

吾々は社会主義の建設を、想像的な、特別あつかひに吾々が創造した人間材料を以てではなく、資本主義から吾々が相續した材料を以て、始めることが出来るのであり（またそうしなければならぬ）。これはいふまでもなく甚だ「困難」ではある。だが問題解決の他の凡ゆる企ては、眞面目なものではないので、全然それについて語るに値しないものである。

労働組合は資本主義發展の當初においては、労働者の分散と無力とから階級的結合への端初への過渡として、労働者階級の一の巨大な前進であつた。プロレタリアートの階級的結合の最高形態、即ちプロレタリアートの政權獲得（それが指導者と階級ならびに大衆とを一個の全體に、不可分のものに結合し得ない間は、それはその名に値しない）が生長し初めるや、労働組合は不可避的に若干の反動的様相を示し、若干の同業組合的繩張り性や反政治主義への若干の傾向や、若干の怠け根性等を示し始めるものである。労働組合を基礎としなければ、また労働組合と労働者階級の黨との交互作用を基礎としなければ、世界何處においてもプロレタリアートの發展は行はれなかつたし、また行はれ得なかつたのである。プロレタリアートによる政權の掌握は、階級としてのプロレタリアートにとり大前進である、そして黨は益々、在來の方法のみによつてではなく新らしき方法によつても、労働組合を教育し、それを指導して行かなければならない。そしてその際忘れてならないのは、労働組合な

るものは以前と同様常に一個の必要な「共產主義の學校であり」、獨裁實現のためにプロレタリアートにとつての一個の準備學校であり、一國全經濟の管理を労働者階級（個々の職業にあらず）の手に、進んでは全労働者の手に永久的に移して行くために必要な一個の労働者聯合であること、また將來もづつとそうあるだらうこと、これである。

上述の意味における労働組合の若干の「反動的様相」は、プロレタリアート獨裁に際しては不可避的である。このことを見誤ることは、資本主義から社會主義への推移の基本的條件を完全に見誤ることである。この「反動的様相」を恐れ、こゝろいふものなくしてやつて行かう、それを飛び超えて行かうといふ試みを企てるのは、愚の骨頂である、何故といふのに、それは即ち労働者階級や農民のおくれ層や大衆を教育し、啓蒙し、訓練し、新生活に導くといふプロレタリアート前衛の任務を忘れることなのだから。他方、一層大きな間違ひは、労働組合的な狹隘性をもつた労働者は唯だの一人も居なくなり、同業組合的な職工組合的な偏見を有つた労働者は唯だの一人も居なくなる時節まで、プロレタリアートの獨裁實現を延期しやうとすることである。政治家の技術（またその任務に對する共產主義者の正しき理解）は、正さに、プロレタリアートの前衛が成功を以て政權を獲得し得る、この掌握に際しまたその後において労働者階級と非プロレタリア労働大衆の廣汎な層の充分なる支持を確保し得る、權力獲得後は益々廣汎な労働大衆を教育し訓練し誘導することによつて彼等の支配を鞏固にし

擴大し得る、條件と時期とを明確に認識するの點に存する。

加之、ロシアよりより進んだ諸國においては、労働組合の若干の反動的様相は、疑ひもなく吾が國よりもつと露骨に現はれて居り、また現はれざるを得ない。吾が國においてはメンゼヴィーキは、正さに同業組合的な狹隘性、労働組合的な利己主義と日和見主義とのゆえに労働組合内に後楯をもつて居た。（そして極く小數の組合内には一部分今日尙ほさうである。）西歐のメンゼヴィーキはもつと深く労働組合の中に「根を下して」居り、そこに労働組合的な、狹隘な、利己的な、化石した、我利我利の小ブルジョア的な帝國主義的考えをもち帝國主義によつて買収された、帝國主義によつて腐らされた「労働者貴族」の、吾國の場合よりはるかに廣汎な層をつくり上げたのである。これは争はれない事實だ。ゴンバース（註四九）に對する、西歐におけるチューオー（註五〇）ヘンダーソン（註五一）、メルレイム（註五二）、レギエン諸氏とその一味に對する闘争は、これと完全に相等しい社會的政治的類型を示してゐる吾が國のメンゼヴィーキに對する闘争よりも比較にならないほどより困難である。この闘争は無慈悲的でなければならず、吾々はそれを吾々がなした様に無條件的に最後まで、即ち日和見主義と愛國社會主義とのあらゆる改善の見込なき指導者を完全に曝露し、彼等を労働組合の外に放逐するに至るまで戦ひ抜かなければならない。この闘争がまだ一定の段階まで遂行されざる限り、吾々は政權を獲得することは出来ない（またそれが獲得の試みをなしてもいけない）。而してこの「一

定段階」は種々なる國々によりまた種々なる條件によつて同一でなく、それを正確に見てとることの出来るのは、それぞれ各國における思慮豊かな、試験づみの、経験あるプロレタリアートの政治的指導者にして始めて可能なのである。(この闘争における成功の尺度たる役割を吾が國で果たしたのは、就中一九一七年一〇月二五日のプロレタリアート革命後僅かにして行はれた一九一七年十一月の憲法制定議會への選舉であつた。この選舉においてメンセヴィーキは完全に打ちのめされた、それはボルセヴィーキの獲得した九〇〇萬票に對し、七〇萬票——後方カウカサスを加えて一四〇萬票——を得た。)

だが「労働貴族」に對する闘争を吾々が行ふのは労働者大衆の名前においてであり、またこの労働者大衆を獲得せんがためである。吾々が日和見主義的愛國主義的指導者に對して闘争するのは、労働者階級を吾々の側に引き寄せんがためである。この全く初歩的な全く明白な眞理を忘れるのは、馬鹿の沙汰であらう。そうして正さなこういふ馬鹿な眞理をしたのが、ドイツの「左翼」共産主義者であつて、彼等は労働組合幹部の反動的革命的な精神から結論して曰く、——労働組合からの脱退、労働組合内における活動の拒否と、労働者組織のための新案形態の創立!! と。これは、許すべからざる愚學であり、共産主義者がブルジョアジーに示し得る最大な功績にひとしい。けだし、あらゆる日和見主義的、社會愛國主義的、カウツキー的な労働組合指導者の如く吾が國のメンセヴィーキもまた、「労働運動内部におけるブルジョアジーの代理人」(このことを吾々はメンセヴィーキについてずつと前か

ら主張して來た) またはアメリカのダニエル・レオン(註五四)一派の巧妙な極めて適切な表現に従えば「資本家階級の労働副官」である。反動的労働組合内では断じて活動しないとは、未發達な乃至後れた労働者大衆を反動的指導者の影響下に任すことであり、ブルジョアジーの代理人、労働貴族または「ブルジョア化した労働者」(イギリスの労働者についての一八五二年のマルクスに宛てたエンゲルスの書簡を見よ)の影響下に任すことである。

正に共産主義者は反動的労働組合に加入すべからずといふ馬鹿げた「理論」こそ、最も雄辯に「大衆」への影響の問題におけるこの「左翼」共産主義者のそそつかしさと、彼等の「大衆」呼ばりが濫用に終つてゐることを物語るものである。吾々が「大衆」に助力し、「大衆」の同情、親愛、歸服を獲得しやうと欲するのであれば、吾々は「指導者」(彼等は日和見主義者、愛國社會主義者として多くの場合、直接間接ブルジョアジーならびに官憲と手を握つてゐる)の側からの奸策や詭計や凌辱や迫害を一つとして恐れてはならないし、また吾々は無條件的に大衆の居るところで活動しなければならぬ。吾々はあらゆる犠牲を拂ひ、絶大の障壁に打ち勝つて、プロレタリアートおよび半プロレタリアート大衆のゐる機關、團體、組合内における——これらの團體が極度に反動的であらうとも——組織的な執拗不屈な宣傳煽動を果し得なければならぬ。労働組合と労働者の協同組合(後者は少なくとももしばしば)こそ、正さに大衆のゐる團體である。イギリスでは労働組合員数は、スエーデンの新聞

「フオルケット・ダーゲン・ポリテイーケン」(一九一九年一〇月三日)の報ずるところによれば、一九一七年末から一九一八年末までに五五〇萬人から六六〇萬人までに、即ち一九パーセント増大した。一九一九年末には七五〇萬人を算した。私はフランスおよびドイツのこれに相應する報告を手許にもつてゐない。しかし一般に知れわたつてゐる如く、これらの國々においても労働組合員数は非常な増加を示してゐる。

これらの事實は明白に、他の無數の現象によつても證明されてゐる事柄、即ち正さにプロレタリアート大衆、「下層」、後れたる層内における階級意識と團結力との増大を示すものである。イギリス、フランス、ドイツの數百萬労働者は初めて、完全な未組織状態から初步的な、低度な、最も單純な、最も近づき易い(まだ全くブルジョア民主主義的偏見に染み込んでゐる者にとつて)組織形態へ、即ち労働組合へ遣入りつゝある——このとき革命的であるが考への足らない共産主義者が傍に立つて叫んで曰く「大衆」「大衆!」と、そして労働組合の内部で活動することを拒絶する!! 労働組合は反動的であるとの口實の下に拒絶する!! 新らしい、さつぱりしたブルジョア民主主義的偏見からは自由であり、同業組合的労働組合的罪障によつて汚されてゐないと自稱する「労働者同盟」、口では廣汎なと稱しながら而かも加入條件としては唯だ(唯だ)「ソヴェート制度と獨裁との承認」のみを認める!! 労働者同盟の案出!!

「左翼」革命家達の犯した此の大きい無思慮、革命にとつてのより大きい害悪を吾々は考ふることは出来ない。ロシア及び聯合國ブルジョアジーに對する未曾有の勝利後二年を経過せる今日のロシアにおいても吾々が「獨裁の承認」を労働組合加入の條件にしようとしたならば、それは一つの愚學であり、吾々は大衆に對する吾々の影響を失ひ、メンセヴィーキに手助けしてやることになるであらう。けだし、共産主義者の全任務は、後れたるものを確信せしめ得る點にあり、彼等に交はりながら活動し得る點にあり、彼等と自分と小兒じみた「左翼」スローガンで以て堰き隔てることではないのだ。疑ふべくもなく、ゴンバース、ヘンダーソン、チューオー、レギエン諸氏は、ドイツの「原則上の」反對派(神よかゝる「原則性」から吾々を守り給へ!)や或はアメリカのI・W・W(註五五)内部の若干の革命家達と同様に、反動的労働組合からの脱退、この組合内での活動の拒否を宣傳する「左翼」共産主義者たちに甚だ感謝してゐる。疑ひもなく、日和見主義の「指導者」諸君はブルジョア外交術のあらゆる詭計に訴え、ブルジョア政府や僧侶、官憲、法廷に援助を求め、共産主義者たちの労働組合に遣入る道を塞ぎ、労働組合から全力を盡して彼等を追ひ出し、彼等のために労働組合内部の活動を出来るだけ不愉快にし、彼等を罵り、嘖しかけ、迫害しようとするであらう。吾々はすべてこゝろいふものに對抗し、あらゆる犠牲を身に引き受けることが出来なければならぬし、また労働組合に入り込み、その中に止り、その中で如何なる事情の下においても共産主義的活動を營んで行くため

とあらば——必要なら——あらゆる種類の術策、詭計、非合法的方法に訴え、ほんとうのことをいはないでゐたり、かくしたりさへしなければならぬ。ツァーリズムの下においては一九〇五年まで、吾々は全然「合法的可能性」をもたなかつた。だが秘密警察の手先ツバトフ（註五六）が労働者の集會や黒百人組型の労働者團體を組織して、革命家を逮捕し、革命家に抗争せんとするや、吾々はこれらの集會や團體に吾が黨員を派遣した（私は個人的に、すぐれたベトログラードの労働者であり、ツァールの將校によつて一九〇六年に射殺されたる同志バブシユキンをおぼえてゐる）。これらの同志は大衆との結合をつくり上げ、そこで彼等の煽動を行ひ、労働者をズバトフ（*）一味の影響から引きはなすことが出来たのであつた。勿論、特に強く根を下した合法的、立憲的、ブルジョア民主主義的偏見に染み込んでゐる西歐では、これはより困難である。だがそれはなし得るし、またなさねばならず、組織的になされなければならない。

*ゴンバース、ヘンダーソン、ジューオー、レギエンはズバトフと一味で、唯だ違ふのはヨーロッパ的な衣装をつけ、ヨーロッパ的な磨きがかまつて居り、彼等の耻すべき政策を遂行する方法が文明化され、洗練され、民主主義的な粉飾をしてゐるだけだ。

第三インターナショナルの執行委員會は、私個人の意見によると、反動的労働組合不参加の政策を公然排撃し、共産黨インターナショナルのこの次の大會に次の提案を提出しなければならぬ。曰く、

共産黨インターナショナルはこの政策一般に排撃（かゝる不参加の無分別とプロレタリアート革命の事業のためのその甚しき害悪とについての詳細なる理由を附して）を宣し、直接的にか間接的にか、公然にか隠然にか、全部的にか部分的にか、それはとまれ——この誤つた政策を支持しつつあるオランダのトリブヌスト（註五七）の態度の排撃を宣す、と。第三インターナショナルは第二インターナショナルの戦術と絶縁し、痛い問題を回避せず、抹殺せず、最も辛辣に投げ出さなければならぬ。吾々は「獨立黨」（ドイツ社會民主獨立黨）に全眞理を面と向き合つて告げたが、全眞理はまた「左翼」共産黨員にも告げられねばならぬ。

六 労働組合における共産主義者の任務

「フランス社會黨の全員、フランスの階級意識あるプロレタリアートへ」宛てた共産黨インターナショナル第二大會の書簡より、一九二〇年七月二九日起草、

……フランスの労働組合（シンチケート）に對する吾々の關係の問題。この問題は非常に重要で、立ち入つて取り扱はれなければならない。諸君は吾々のテーゼならびにその他共産黨インターナショナルの公文書からして、反動的労働組合の陣列から去り、この組合に背を向け、彼等に對立して何か新らしい「一般的」労働者同盟を組織することを吾々に提議してゐる「左翼」共産主義者達に對し吾

々は斷乎として排撃してゐることを、知つてゐるであらう。この吾々の見解はレギエン一派の自由な黄色的な、社會民主黨系の労働組合についていはれるのみならず、またチューオー一派を幹部とするフランスの労働組合にも妥當する。これ等の労働組合が不幸にしてレギエンやチューオーに追隨するやうなことがあらうとも、吾々は革命家や共産主義者の大衆的労働組合からの脱退に、反對である。革命家と共産主義者とは労働者大衆のゐる所であれば、どこにでもゐなければならぬ。ロシアの共産主義者は労働組合においては長い間小數者であつた。ロシアの共産主義者は、最も後れた、時には反動的な労働者團體の内部でさへ彼等の理想のために闘うことを知つてゐた。

吾々はフランスにおける吾々の同志に、如何なる事情があらうとも労働組合の埒内から去らないことを要求する。反對に、若し彼等が共産インターナショナルに對する彼等の義務を果さうとするのであれば、彼等は労働組合内における活動を強めなければならないのである。

愛國社會主義者の最後の逃げ場は、現在正さに労働組合である。政治的團體としての第二インターナショナルはカルタの家の如く崩壊したが、黄色組合のアムステルダムインターナショナル(註五八)は尙ほ裏切社會主義者にとつて重要な地盤である。アムステルダム黄色インターナショナルは今日世界革命のためには國際聯盟よりも尙ほ有害であり危険である。レギエン、ゴムバース、チューオーの助けをかりて、ブルジョアジーはアムステルダムインターナショナルから彼等の掠奪目的の道具とし

て、帝國主義戰爭當時の全世界の社會民主黨と同じものを作り上げやうと試みてゐる。

このことからして吾々共産主義者にとつては、労働組合運動に十倍の注意を向ける義務が生ずる。吾々はこの労働組合を、如何なる代償を拂つても資本家と裏切社會主義者との手から奪ひ取らなければならぬ。そのために吾々はこの労働組合内にゐなければならず、そのために吾々は吾々の精銳をそこに送らなければならない。

吾々の同志は労働組合内に止るであらう、だが彼等はそこで孤立的に、散り散りばらばらに行動はしないであらう。吾々は各労働組合内部に、各地區グループの内部に、一個の共産主義者のグループ、共産主義者の細胞を形成しなければならない。日常闘争の地盤の上で吾々は労働組合の内部において、大小さまざまなチューオーの謀計をあばき出さなければならぬ。吾々は労働組合の平組合員に目をつけなければならない。吾々は裏切社會主義者の指導者を労働組合から追ひ出さなければならぬ。吾々は組織的な執拗な闘争によつて裏切社會主義者とチューオーの如き黄色社會主義者の影響から組合を次から次へと奪ひ取らなければならない。ロシアのボルセヴィキは長年の活動において、この任務を果すことを知つた。十月革命の前夜においてすら尙ほロシアの共産主義者は労働組合内では小數派であつた。それが権力を握り、階級意識ある労働者に新らしい宣傳手段を手渡してやつた後、ロシアのボルセヴィキは革命後の甚だ短日月のうちに労働組合運動の壓倒的多數を獲得する

ことが出来た。この逆を全世界の共産主義者と革命家とは進まなければならない。

フロサル（註五九）は彼のモスクワよりの報告書中「C・G・T（註六〇）は革命を吾々（黨）なくして、吾々は革命をそれ（労働組合）なくして遂行するであらう」と聲明してゐるがこの命題は少なくとも充分明かではない。革命はそれを欲しない人々の助けを借りては遂行され得ない。諸君はプロレタリア革命を、その全精神がプロレタリア革命を失敗させることに向けられてゐるジューオー氏と一所に行ふわけにはゆかないだらう。諸君はプロレタリア革命をヂューオーと抗争してのみ、同様アルバート・トーマやピエル・ルノーデル（註六一）と抗争してのみ、完成するであらう。諸君が黨を日和見主義から清め議會における諸君の代議士を共産主義者として登場せしめ、諸君が諸君の黨の陣列から黄色者流を追ひ出そうとするならば、即ち諸君が共産主義者となりさへすれば、平労働者、労働組合員は諸君に従ひ、ヂューオーに背を向けるであらう。諸君が日和見主義を片づけることが早ければ早いほど、諸君はシンジカリズムの偏見をより早く克服するであらう。

赤色労働組合は、國際的に結合し始めた。共産黨インターナショナル執行委員會の發意により、イタリー、ロシア、イギリスの左翼労働組合は三角同盟（註六二）を形成し、この同盟から八月または九月に黄色労働組合のアムステルダムインターナショナルに對抗すべき赤色労働組合の國際大會が招集せられるであらう。フランスでもこの企てを支持せよ。諸君の労働組合もまた赤色労働組合のイン

ターナショナルに加盟し、黄色者流と最後決定的に斷絶せよ。これがフランスにおけるほんとうの革命家の任務である。

第二篇 十月前夜における労働組合問題

第一章 ロシアの農業労働者組合創設の必要

について

「ブラウダ」の論文より、一九一七年八月二四日およ

び二五日の九〇號、九一號、

現在ベテルスブルグに開會中の全露労働組合會議は、一つの非常に重要な問題を取扱はなければならぬ。問題は、農業労働者の全露的な組合をつくることである。

ロシアのあらゆる階級は組織をもつてゐる。あらゆる他の階級よりも搾取され、ひどい窮乏裡に生活し、最もひどく寸断され抑え付けられた階級、ロシアの農業賃銀労働者階級は、謂はゞ忘れられた状態だ。若干の非ロシア的邊境地方、譬へばレットランドには農業賃銀労働者の組織がある。大ロシアおよびウクライナ諸縣の大多數においては、農業プロレタリアートの階級組織は一つもない。

ロシアプロレタリアートの前衛——工業労働者の組合——の高貴にして且つ無條件的な義務は、彼等の兄弟、即ち農業労働者を助けに行くことである。農業労働者を組織する困難は大きい。それは明

際であり、全資本主義諸國の經驗によつて證明されたところである。

それだけ益々必要なのは、出来るだけ早く且つ出来るだけ精力的に、ロシアにおける政治的自由を利用して、全露農業労働者組合を即刻に形成することである。労働組合會議こそ正さにこのことを果し得るし、また果さなければならぬ。今日會議に集つたところのより經驗のある、より發達した、より階級意識に富むプロレタリアートの代表者こそ正さに、自分を獨立的に組織しつゝあるプロレタリアートの陣列に参加し、彼等の労働組合の陣列に参加するやう、農業労働者に向つて叫びかけ得るし、また叫びかけねばならない。正さに工場の賃銀労働者こそイニシアチブを取つて、全ロシアに分布してゐる労働組合の細胞やグループや小團體を利用して、農業労働者を獨自の生活に呼び起こし彼等の生活状態の改善のための闘争に積極的に参加し、彼等の階級利益を擁護するやうに呼び醒まされなければならない。

多くの人々にはこう見えるかも知れない——そしてむしろそれは現在支配的な意見ですらあらう——即ち、農民階級が全ロシアにわたつて自ら組織し、土地に對する私有權の撤廢とその「平等」利用權とを宣言してゐる現在、農業労働者組合を創設することは時宜に適應しない、と。

逆だ。正さにこういふ時期にこそそれは時宜に適し、猶豫すべからざるものなのだ。プロレタリアートの階級的利益の立場に立つものにとつて些かの疑ひもあり得ないのは、ロシア社會民主労働黨ス

トツクホルム大會（註六三）においてボルセヴィーキの提案によりメンセヴィーキから採擇され、その後ロシア社會民主労働黨の綱領のうちに入らるゝに到つたテーゼの正しいことである。このテーゼは曰く。

「黨はあらゆる機會において、またあらゆる民主主義的改革に際して、農業プロレタリアートの獨自的階級組織に邁進し、農業労働者に彼等の利益とブルジョアの農民のそれとの根本的對立を明かにし、商品生産の条件下では斷じて大衆の窮乏を除き得ないやうな農業制度にこまかされることのないやう彼等に警告し、最後にはあらゆる困窮とあらゆる搾取とを世界から取り除き得る唯一の手段として完全な社會主義的變革の必要を彼等に指示することを、その任務とする。」

このテーゼの正當性を認識し得ない唯だ一人の階級意識ある労働者も、唯だ一人の労働組合員も決してない。農業プロレタリアートの獨自的階級組織に關する限りそれを實現することこそ労働組合の任務である。

正さに革命時において、勤勞大衆一般の間に、分けても労働者の間に、自己を主張し、進路を切り開き、労働者自身が労働の問題を獨自的に決定しようとする努力が活潑となつて来る——正さにかゝる時期にこそ、労働組合はその狭い同業組合的利益に閉ぢこもるべきではない。それはその弱い友達農業労働者を忘れず、ロシア農業労働者組合を創設し、以て彼等を全力を擧げて助力せねばならない。

第二章 労働者の管理について

「ボルセヴィキは政權を維持しうるか？」より、
一九一七年九月末、

プロレタリアート獨裁の主要困難は、全國的規模における生産物の生産と分配についての、最も正確にして良心的な計算と管理、即ち労働者の管理の實現の點にある。

「ノヴァヤ・ジーズニ」(註六四)に書いてゐる人達が吾々を非難して、吾々は「労働者の管理」といふスローガンを掲げることによつてサンチカリズム(註六五)に墮したといふ場合、この非難は、本當に考へたのではなくスツルーベ(註六六)式の諧記した「マルクス主義」の書生ツツぽ的な單純な適用の一模範例であつた。サンチカリズムはプロレタリアートの獨裁を拒否するか、またはそれを政權一般と同様に末席の方に追ひやるものなのだ。吾々はそれを最上席にもつて来る。吾々が單純に「ノヴァヤ・ジーズニ」派の連中の意味で、労働者管理にあらずして、國家管理、といふならば、そこから生れて来るものは一個のブルジョア改良主義的文句であり、根本的には一個の純カデット(註六七)的公式である。けれどカデットは「國家管理」への労働者の参加に反對する筈は全然ない筈だからである。コルニロフ(註六七)流のカデットは、労働者のかゝる参加はブルジョアジーにとり労働

者を欺瞞する最良手段であり、多くのグチニコフ、ニキチン、プロコポウイチ、ツエレテリ(註六九)とその全徒黨特有の洗練された政治的買収の最良手段たることを、すつかりわきまえてゐるからである。

吾々が「労働者管理」を唱え、而かもこのスローガンをいつもプロレタリアートの獨裁と相並べ、いつも直ぐその後に掲げるとすれば、吾々はこれによつて如何なる國家を問題にしてゐるかを明かにしてゐるのである。國家は一階級の支配の機關である。如何なる階級であるか？ブルジョアジーが問題であれば、正さに、ロシアの労働民衆が既に半年以上もその正體を知ることの出來たかのカデット・コルニロフ的「ケレンスキー國家」である。プロレタリアートの國家、即ちプロレタリア獨裁が問題であれば、労働者管理は、生産物の生産と分配についての全國民的、全包括的、遍在的、最も正確にして良心的計算たり得るであらう。

これが主たる困難であり、これがプロレタリア革命即ち社會主義革命の主たる任務である。ソヴェエトなくしてはこの任務は、少くともロシアにおいては、解決されないであらう。ソヴェエトこそ、世界史的意義を有するこの任務を解決し得る、プロレタリアートの組織的事業を物語るものである。

こゝで、吾々は國家機關の他の側面の問題に當面する。主として國家機關たる常備軍、警察、官吏群以外に、近代國家には銀行およびシンチケートと特に密接に結びついてゐる一機關、いつて見れば

管理や簿記の老大な仕事を掌る一機關がある。この機關は破壊さるべからず、また破壊さるを要しない。吾々はそれを資本家から奪取しなければならぬ。吾々は資本家を一切合切の彼等の影響力と共に、この機關から切り断ち、打ち切り、伐り離さなければならぬ。吾々はそれをプロレタリアートソヴェートに従属せしめなければならぬ。吾々はそれを仕上げて行き、より包括的なものにつくり上げ、それを全民衆に役立つ一機關にして行かなければならぬ。大資本主義が既に實現した諸成果を基礎とするならば、(この成果を基礎としてのみ、一般にプロレタリアート革命はその目的を達成し得る如く)吾々はこのことをなし得るのである。

資本主義は、銀行、シンヂケート、郵便、消費組合、使用人組合の如き計算機關を創出した。大銀行なくして社會主義は實現され得ないであらう。

大銀行は、吾々が社會主義を實現するために必要とし、吾々が資本主義から出来合ひのまいで譲り受けたところの「國家機關」である。そしてその際吾々の任務は専ら、この卓越せる機關を資本主義的に歪曲するものを切り棄て、もつと老々にし、もつと民主主義的に、もつと包括的なものにつくり上げることである。量は質に轉化する。各市町村、各工場にその支店を有する最大規模の單一の國立銀行——これは既に一〇中九まで社會主義的機關である。それは全國的規模における簿記を意味し、生産物の生産と分配の全國的管理を意味し、いはゞそれは社會主義社會の一種の骨格である。

この「國家機關」を(これは資本主義の下では完全に國家的とはなり得ないが、吾が國において、社會主義の下では完全に國家的となるであらう)吾々は「受け取る」ことが出来、そして一舉にして、一布告を以て、「運轉せしめ」得るのである。けだし、簿記、統制、記録、計算はこの場合、大部分自分もプロレタリアート乃至半プロレタリアートの状態にある使用人によつてなされるからである。

プロレタリアート政府が一片の處分令を發することによつて、これ等の使用人は國家の使用人に轉化されることが出来、またされなければならない。それは丁度、ブリアン(註七〇)輩やその他のブルジョア大臣などの資本主義の番犬達が一筆走らせただけで、ストライキ最中の鐵道従業員を國家の官吏に變ずると同じである。吾々は益々多數のかゝる國家官吏を必要とし、またそれを獲得することが出来る。けだし資本主義は計算管理の機能を單純化し、それを比較的簡單な、讀み書き出来る人間であれば誰れでもこなし得る記帳の仕事にまでして了つたからである。

銀行、シンヂケート、商事企業等々の「國家化」はたいへんた易い、資本主義と金融資本とが既になして呉れた準備仕事のお影で技術的にも、またソヴェートによる統制と監視といふ條件の下では政治的にも、容易なのである。

その數の點では著しく少ない部分を占める資本家に加擔してゐる高級使用人に關しては、吾々は資

本家と同様に、即ち「嚴酷に」取扱はなければならぬ。それは資本家と同様「反抗」するであらう。この反抗を吾々は粉碎しなければならぬ。そして、いつまでたつても幼稚なベシエコーノフ(註七一)が生粹の「政治的乳兒」の如く既に一九一七年六月に、「資本家の反抗は粉碎された」と片言いつたとすれば、プロレタリアートはこの小兒じみた言葉、小兒じみた誇言、この若者らしいお饒舌を眞剣に行動に移し變へるであらう。

このことを吾々は完成し得るであらう、けだし問題は人口の極少部分、文字通り一握りの人間の抵抗を打ち平げることだからである。こういう人達は誰れも彼れも一人一人使用人組合、労働組合、協同組合およびソヴェートによつて監視を受けてゐるので、このチツ・チツツユ(註七一)の誰れも彼れも、セダンにおけるフランス人の如く、自分が包圍されてゐるのを見るであらう。吾々はこのチツ・チツツユのすべての名前を知つてゐる、即ち吾々は理事、重役、大株主等の名簿をひもどきさえすれば、充分なのである。全ロシアにわたつて彼等は數百人、高く見積つて數千人である。プロレタリアート國家はそのソヴェート機關、その使用人組合等を以て、一打乃至一〇〇人に及ぶ監視人を彼等一人々々の後に配置し、労働者統制(資本家に對する)の力を借りて、彼等のあらゆる反抗を打破し得るのみならず、彼等の反抗そのものを不可能にすることが出来るであらう。

附 録 (註)

(一)九〇年代におけるロシア産業の急速な發展と關連して、ストライキ運動の飛躍も認められるに到つた。一八九六—九七年にはベテルスブルグでストライキが勃發し、それは他の地方にも波及した。これ等のストライキはそれより以前のストライキよりも、組織性に優れ、意識的要素を多分にもつてゐるのが特色であつて、それ以前のストライキはむしろ自然發生的騷擾の性質を帯び、機械の打つ毀し、建物の破壊等を隨伴した。これと同じ労働者の自然發生的行動は、資本主義の初期には西歐にもあつた。(イギリスの「機械打つ毀し屋」ドイツの織物工一揆等)労働者運動が生長するに従ひ、ストライキは益々自然發生的性質を失ひ、益々組織的となつた。

(二)カール・カウツキー——ドイツ社會民主黨ならびに第二インターナショナルの最もすぐれたマルクス主義理論家。その科學的活動をエンゲルスの直接的指導の下に始めた。一八八七年以來ドイツ社會民主黨理論雜誌「ノイエ・ツァイト(新時代)」の編輯者。九〇年代ならびにその後も、カウツキーはベルンスタインの修正主義(註二七を見よ)の決定的批評家であつた。二〇世紀の最初の一〇年間は、彼は全體において正統マルクス主義を代表した。大戦の二、三年前から、彼は右翼に向きかけた。彼は、ドイツ社會民主黨における「マルクス主義中央派」の頭目となり黨の左翼派徹底的マルク

ス主義派と分離した。(左翼はローザ・ルクセンブルグ、カール・リーブクネヒト、フランツ・メーリングおよびクララ・ツェットキンを頭目として、遂にスバルタカスヴンドを創立し、これから後ドイツ共産黨は生れたのである。)大戦中カウツキーは、インターナショナル主義を祖國防衛と結びつけやうと努め、中央主義——姿を変えた改良主義の一種——の理論家となつた。ロシア革命後カウツキーは共産主義運動とソヴェート制度との卑劣な似而非マルクス主義批判を以て現はれ、ブルジョア民主主義と議會主義とを擁護し、プロレタリアート獨裁を攻撃し、終に一九二五年にはソヴェート國家への干渉とその強力的顛覆とを宣傳するに到つた。

(三)社會民主主義——労働者運動における革命的マルクス主義的學說信奉者の舊稱。今日この名稱はそのもとの意味にかなはなくなつた。けだし今日社會民主主義者と稱してゐるものは、労働者運動における日和見主義的要素であつて、彼等は階級闘争の立場に立たずして、階級協調の立場に立ち、従つて決してマルクス主義者にあらずして、似而非マルクス主義者であるからである。革命的マルクス主義者はこの日和見主義者から絶縁して、今日自ら共産主義者といつてゐる。——因みに、マルクス・エンゲルスも自ら共産主義者といつた。

(四)クレド(信仰個條)——クスコヴァの起草せる、當時のロシア「青年」社會民主主義者の政綱にして、經濟主義者(註一〇を見上)の實踐の理論的基礎たるべきものであつた。

(五)トレード・ユニオンイズム(労働組合主義)——その任務を社會主義的目標の實現に見ずして、單に資本主義的社會秩序の埒内においての労働者の利益の保證に見てゐるところの労働組合運動であつて、彼等は資本主義を亡びることなきものと認識してゐる。トレード・ユニオンイズムのイデオロギイは甚だ有害である、といふのはそれはプロレタリアートのイデオロギイではなくして、ブルジョア改良主義のイデオロギイであるから。トレード・ユニオンイズムの根本的特徴は、狹隘な同業組合的精神、組織上の極度の分散、資本主義制度との協調である。舊トレード・ユニオンイズムは闘争の手段によることを退け、これを協約、協定等によつて取換え得ると信じてゐた。最近までトレード・ユニオンイズムは労働者階級の獨立な政治闘争と政黨との必要を否定した。イギリスにトレード・ユニオンイズムは生れ、一九世紀の後半期にその最高頂に達した。だが既に八〇年代にイギリスにおいてすら、労働者運動における社會主義的要素の強大化と相連れて、新らしい多かれ少なかれ革命的なトレード・ユニオンイズムが始まつた。舊トレード・ユニオンイズムのイデオロギイは今日労働組合において——たゞにイギリスのみでなく——まだ甚だ強い。それは大多數の改良主義的指導者と労働組合役員との公認イデオロギイである。が他方組合員大衆は左の方に、革命的労働組合運動の方へ發展してゐる。(イギリスにおける少數派運動、他の諸國における左翼反對派。)

(六)フェルジナンド・ラツサール(一八二四—一八六四年)——非マルクス主義派のドイツ社會主

義者。一八六三年にドイツにおける最初の獨立労働者黨たる全ドイツ労働者同盟を創立す。ゴーク大會（一八七五年）において、全ドイツ労働者同盟は、ドイツのマルクス主義者（ベーベル、ウイヘルム・リーブクネヒト）によつて創立された社會民主労働黨（アイゼナツハ黨）と合同した。合同から生れたドイツ社會民主黨は、その日和見主義的陥落に到るまで全労働者運動の模範として役立つた。ラツサールの主な功績は、ドイツの労働者階級をブルジョア民主主義者による組織的精神的後見から解放したことにある。

（七）シユルエ・デーリツツ——プロシヤ國民議會議員にして、労働階級窮狀調査委員會議長。ドイツ手工業者と労働者との間に、階級闘争によらずして生産組合消費組合の助けを以て社會問題解決の思想を宣傳した。ラツサールは、労働大衆をブルジョア民主主義的組織とイデオロギーに従屬せしめるこの企てに、極力反抗した。

（八）進歩黨——自由主義ブルジョアジの黨、一八六一年、プロシヤ憲法事件の激化に際し、舊自由黨所屬の東プロシヤ出の代議員にしてこの黨の政策に不満であつた一連の人々と、古い四八年の民主主義者若干名によつて創立された。その綱領は純粹のブルジョア自由主義であつた。即ち、ほんとうに「民主主義的要求、普通選舉、出版結社の自由等、ブルジョアジと共にプロレタリアートの要求するものは沈黙を以て看逃がされた。」（ヘーリング）ピスマークと當時のユンカー的反動とに對し

て微弱ではあつたがとまれ當初反對してゐたので、進歩黨にはブルジョアジの自由主義的要素のみならず、労働者の最も進歩的な層もまた集まつた。ラツサールの煽動の影響を受けて、たしかに労働者は頗る急速に進歩黨から離なれ、独自の黨をつくつた。普佛戦争の後、進歩黨は益々ピスマークと接近するに到り、益々右の方に赴いた。一八八四年進歩黨はドイツ自由黨期成自由同盟と一つになつた。これは一八九三年に自由人民黨と自由同盟とに分裂した。一九一〇年に兩者は南ドイツ人民黨と共に、進歩人民黨に結成した。一九一八年一月の變革以後、この黨はその名を變え、今日ドイツ民主黨と呼んでゐる。

（九）ドイツにおけるカソリック若しくはキリスト教労働者組合と王制的労働者組合——公けには「無黨」を標榜した労働組合の一種であるが、實際は一定の政治的集團（中央黨その他）によつて指導される。キリスト教的その他の原則の假裝の下に、産業平和的政治が營まれてゐる。

ヒルシユ・デユンカー組合（一八八六年、自由主義者ヒルシユとその同志デユンカーによつて、ベーベル及びリーブクネヒトによる社會主義的宣傳から労働者の注意を外らさんがために、創立された）もまた、階級的見地を排撃し、同じブルジョア的政治を追求してゐる。

社會民主主義組合は、社會民主黨の直接的協力と指導下に（譬へばドイツ、オーストリア、スウェーデン、デンマーク、オランダにおいて）つくられた労働組合組織であつて、以前は純粹な階級的立

脚地をとり、資本主義の埒内における労働者利益の擁護以外に、資本主義を倒すことをその任務としてゐた。

(一〇) 経済主義者——ロシア社会民主党内における日和見的方向の信奉者にて、今世紀の當初特に膨脹し、黨組織の多くに侵入した。経済主義者は中央集権的政黨の必要を否定し、主力を労働者階級の自然生長的行動におき、労働者階級の獨自的政治闘争をも否定し、その任務を單に、日常闘争のため、政治的中立を奉ずる労働組合や労働者協同組合その他を發展せしめるために、資本に對する經濟闘争のうちのみありとし、ツァーリズムに對する闘争は主として智識階級と自由主義ブルジョアジの仕事とした。

レーニンおよびブレハーノフは、経済主義者に對する猛烈な闘争を行つた。そして経済主義はまもなく姿を消して、メンセヴィズムとなつた。

(一一) ラボーチャヤ・ムイスリ (労働者思想) ——一八九七年ペテルスブルグに創刊された社会民主主義紙、最も決定的に経済主義の立場を主張す。(註一〇を見よ)

(一二) 勿論當時の社会民主党のことで、今日のそれではない。(註三を見よ)

(一三) ラボーチャヤ・デエーロ (労働者問題) ——社会民主主義雜誌、一八九九—一九〇二年の間クリツヌースキーおよびマルツィノフ (註一五を見よ) 編輯の下に發刊され、ロシア社会民主党内に

おける日和見主義的潮流を反映した。この雜誌は勿論、ラボーチャヤ・ムイスリ (註一一を見よ) の立場を超えやうと努力したことは事實であるが、いつもまた日和見主義に墮落した。

(一四) イスクラ (火花) ——ロシア社会民主労働黨中央機關紙、一九〇一年創刊、外國にて發行する。一九〇三年までは——レーニン、ブレハーノフ、マルトフ、アツセルロイド、ザスリツツの指導の下に——當時のロシア社会民主党内におけるあらゆる革命的要素を一つの統一的中央集権黨に結成する努力の中軸たる役割をしてゐて、革命的、純粹マルクス主義的立場を代表した。そして最も決定的に経済主義その他の日和見主義的偏向と戦つた。ロシア社会民主労働黨第一回大會 (一九〇三年) 後、同紙はメンセヴィーキの手に陥り、その革命的性質を失つた。

(一五) マルツィノフ——ラボーチャヤ・デエーロ (註三を見よ) 編輯者の一人、九〇年代においては経済主義の卓越せる代表者、ロシア社会民主黨分裂 (一九〇三年) に際しては、メンセヴィーキに加擔す。戦時中インタナショナルリストとなり、一九二〇年以來ロシア共産黨員である。

(一六) 「ロシア社会民主主義者同盟」は、一九〇五年に創立され、間もなく経済主義に傾き始めた。一九〇五年スイスにおいて開かれた同盟大會において、革命的小數派は終に同盟から脱退し、「ロシア社会民主革命團」をつくり、ブレハーノフ (註三〇を見よ) はその頭目であつた。ラボーチャヤ・デエーロ (註一三を見よ) をも含んでゐる多數派は、舊名を保持した。外國ならびにロシアにおける同

盟の重要性は益々少なくなつて行く。ロシア社会民主労働黨第二回大會において同盟は解體を宣言された。

(一七)ラボーチヤヤ・デエーロ誌に載せられた一論文の表題。

(一八)ゼムスキーエ・ナツァールニーク——農村における官憲の代表者、ツァー政府の労働者農民に向けたる彈壓政策の象徴と考へられてゐた。

(一九)異教徒——キリスト教の宗派の所屬者、正統國教會に背いて居り、絶對主義に對し反對的態度をとつて居たので、ツァー政府から迫害された。

(二〇)學生——革命的活動のために罪せられるか、または嫌疑を蒙つたものは、兵士の軍服を着せられ、最も邊境な地方に送られるのを常とした。

(二一)ブンドまたはリトアニア、ポーランド、ならびにロシアにおける全ユダヤ人労働者同盟——一八九七年に創立、一八九八年に自治團體としてロシア社会民主労働黨に加盟す。社会民主労働黨第二回大會(一九〇三年)が嚴重な中央集權主義の原則を認むるや、ブンドは黨から脱退した。再合同は、ロシア社会民主労働黨ストツクホルム合同大會(一九〇六年)の後初めて行はれた。その創立以來、ブンドはメンセヴィーキに接近してゐた。一〇月革命後初めてそれは、メンセヴィズムの原則を克服し初めた。分裂が生じ、成員の大部分はボルセヴィズムに移つた。

(二二)ラボーチヤヤ・ムイスリー——(註一一を見よ)

(二三)自己解放團——思想上ラボーチヤヤ・デエーロに近し。

(二四)ラボーチヤヤ・デエーロ——(註一三を見よ)

(二五)ウエツプ夫妻——イギリス労働組合主義史の基本的著作の有名な著者。一九二三年ウエツプはマクドナルドの「労働政府」において商務大臣の地位についた。

(二六)ラボーチヤヤ・デエーロ誌の信奉者(註一三を見よ)

(二七)ベルンスタイン主義者——修正主義理論家エドワード・ベルンスタインの信奉者、ベルンスタインは八〇年代エンゲルスの指導下に革命的マルクス主義者としてその活動を始め、一九世紀の終りに革命的マルクス主義から離れた。その有名な著書「社会主義の諸前提」(一八九九年)においてベルンスタインはマルクス主義學說の修正をはじめた。「修正主義者」の名前もこれに由来する。この説によると、歴史的過程はブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争の激化とならずして、その弱勢化となり、労働者階級の中心任務は社会主義のための闘争ではなくして、改良のための闘争であり、社会主義を漸次議會主義的闘争によつて達成することが可能である、と。ベルンスタインは第二インターナショナルに所屬するあらゆる黨派——ロシアの社会民主黨また——における日和見主義の理論的指導者となつた。

(二八)段階論——經濟主義者の理論、これによるとプロレタリアートの闘争は種々な相繼起する段階を通過しなければならぬ。先づ最初に純粹な經濟闘争、プロレタリアートが經濟闘争の地盤の上において充分な經驗を積むや、政治的煽動に踏み出してもよい、云々。

(二九)ツアールの支配下においては、ロシア社會民主黨は民主主義的諸要求のためにも戦つた。この要求の實現は當時の状況にあつては、社會主義のための闘争を樂にすることを意味してゐた。

(三〇)ゲオルグ・プレハーノフ——ロシアマルクス主義の建設者、一八八三年に最初のロシア社會民主主義團體「労働解放團」を創立す。一九〇一年にプレハーノフは、レーニンによつて創刊された社會民主主義紙「イストラ」(註一四を見よ)の編輯部に入つた。この新聞は當時優勢であつた日和見主義的傾向と闘ひ、中央集權的革命黨を創設する事をその任務としてゐた。ロシア社會民主労働黨第二回大會における分裂後、プレハーノフは若干躊躇した後、メンセヴィーキに加擔した。戦争中、彼は極端な愛國社會主義的立場をとつた。一〇月革命當時、プレハーノフは特に精力的にレーニン、ボルセヴィーキ、およびボルセヴィーキ政權に抗争した。プレハーノフは、第二インターナショナルの最も典型的な且つ最も勢力のある指導者の一人であつた。その哲學的著作においては、彼は正統マルクス主義者であつた。レーニンはプレハーノフの哲學的著作を「共產主義の必修教科書」として推せんしてゐる。プレハーノフは一九一八年五月に死んだ。

(三一)清算主義者——ロシア社會民主黨内におけるメンセヴィーキ的方向の加擔者にして、一九〇五年革命の敗北後、労働者運動が粉砕され、非合法的團體への参加が政府によつて最も嚴重に罰せられたとき、古い非合法團體を清算しやうとし、社會民主主義的活動を、合法的限界に限るべきだと、煽動した。ボルセヴィーキは、實際においてプロレタリアートの独自の階級闘争の放棄とブルジョアジーの思想的制覇へのその屈服を意味するところの、清算主義者に対する情熱的闘争を行つた。

(三二)マルクス主義者——清算主義者と區別して、ボルセヴィーキは自らをツアールの官憲を顧慮して合法的労働者新聞において、こう呼んだ。

(三三)一九一二年四月レナ河(シベリア)金礦において、其處の労働者に對しおそろしい虐殺が行はれた。レナ事件は、類例なき鋭さを以て、經濟的ストライキの政治的ストライキへの轉化を示した。事實の理論は最初純粹に經濟的性質の低度な要求を提出したにすぎなかつた労働者を驅つて、ツアールの専制に對する直接的闘争に赴かしめた。ストライキの流血的鎮壓は、全ロシアに一聯のはげしい政治的ストライキを勃發せしめた。

(三四)ドレアンセ——フランス大革命において、憲法制定代議員に宛てて選舉人が彼等の希望や苦惱を訴えたところの文書。

(三五)ここで問題の決議は、一九〇七年一月第二インターナショナルのスイツトガルト大會にお

いて決議されたものであつた。レーニンの議論をよりよく理解するために、吾々は次に原文のまゝこれを掲げる。

一、精神的、政治的、ならびに経済的奴隷の桎梏からプロレタリアートを完全に解放するためには労働者階級の政治闘争と経済闘争とが同程度に必要である。社会主義的黨組織の任務が主としてプロレタリアートの政治闘争の領域にある如く、労働組合的組織の任務は就中労働者階級の経済闘争の領域にある。黨と組合とは従つて、プロレタリアートの解放闘争において同等價値の任務を遂行しなければならぬ。

兩組織のそれぞれは、その性質によつて定つた特有の領域を有し、この領域においては、その行動を完全に獨立的に決定しなければならない。だがこれと相並んで、黨組織と労働組合組織との共同一致的行動によつてのみその成功が勝ち得られるところの、プロレタリアート階級闘争の領域が益々廣まりつゝあるのが見られる。

プロレタリアートの闘争はそれ故、労働組合と黨組織との關係が密接なればなるほど、益々有効に徹底的に行はれる、そしてその際労働組合の統一に留意されなければならない。

大會は、あらゆる國々において黨と労働組合との密接なる關係がつくられ、継続的に維持さるゝやう、労働者階級は努めなければならないことを、宣言する。

黨と組合とは、その行動において道徳的に獎勵し合ひ支持し合ひ、その闘争においてはプロレタリアートの階級闘争を促進する單なる手段として役立つべきである。

労働組合は労働者の解放闘争における義務を、その行動において社会主義的精神によつて指導されるのみ、遂行することが出来るであらう。労働者の社会的地位の向上と改善とに向つての労働組合の努力を促進するの義務が、黨に課せられてゐる。

大會は、資本主義的生産方法の進歩、生産力集中の發展企業家結合の發展、個々の經營の全ブルジョア社会への依存性の増大は、労働組合が若し専ら同業組合的利己主義と資本と労働との利益階調論との基礎の上において職業的協同團體の利益をはかるならば、労働組合的活動を無力にしなければならぬものであることを、宣言する。

労働組合の組織が統一的であればあるほど、その労働組合的闘争に缺くべからざる基金が豊富であればあるほど、経済生活の諸條件の關連についてのその組合員の洞察がより深ければ深いほど、社会主義的理想から最も力強く生れ出るところの彼等の犠牲心と情熱がより高ければ高いほど、労働組合は搾取と抑壓とに對する闘争を益々成功的に遂行することが出来る、と大會は考ふる。

二、一八九九年のブラツセル會議において提出され、一九〇〇年パリ大會において採擇された規定に據り、大會はあらゆる労働組合に國際大會に代表を送り、ブラツセルにおける國際社会主義事務局

と密接な連絡をとることを勤める。大會は後者に、ペルリンの國際労働組合書記局と組織と煽動とについての相互的報告をし合ふために、連絡するやう委任する。

三、大會は國際社會主義事務局に委託するに、各國における労働組合と社會主義黨との關係についての研究を容易にすることが出来、次の大會においてこの點につき報告をなし得るためにあらゆる資料を集めることを以てす。

(三六) 社會革命黨——小ブルジョア的な、主として農民中の一定層を支柱とした黨であつて、專制主義の顛覆するまでは非常に急進的であつた(テロの使用など)。戦争となるや愛國社會主義となる。十月革命後、社會革命黨は積極的に反動革命の側において闘ひ、革命の最も優秀な指導者に對する闘争にテロリスト的方法を用ひた(レーニンの暗殺軍)。現在社會革命黨は、政治的には絶對的に無勢力である。

(三七) プレハーノフ——註三〇を見よ。

(三八) ルナチヤルスキー——ロシア社會民主労働黨の古い黨員。有名な著述家、劇作家、批評家、哲學者、一〇月革命後教育人民委員。

(三九) 修正主義者——註二七を見よ。

(四〇) アウグスト・ベーベル——ドイツ社會民主黨の創立者の一人にて有名な指導者、修正主義者

に對し正統マルクス主義を擁護す、尤も常に決定的且つ首尾一貫せるといふわけには行かなかつたけれども。一九一三年に死す。

(四一) ウオルマル——有名なドイツ社會民主黨員、ベルンスタインの修正主義(註一七を見よ)の信奉者、あらゆる基本的問題(軍國主義、農業問題、殖民政策)において明白な改良主義的立場をとる。

(四二) サヴレメニイ・ミール——ロシアの合法マルクス主義雜誌にて、プレハーノフまた同人たり。戦争中、この雜誌は「祖國擁護」を立場とす。

(四三) バゼン元帥——ドイツ軍にメツツに包圍され一八七〇年に降服せるフランスライン軍司令官。レーニンは、バゼンは終始敵から退却しやうとかよつてゐたので有名だ、と云つてゐる。

(四四) ロイド・ジョージ——有名なイギリス自由黨指導者。嘗つてのイギリス首相。一九〇七年彼は、リヒャード・ベルその他労働組合指導者と妥協し七年間の效力をもつ貸銀協約に賛成せしめて、鐵道従業員ストライキを敗北せしめた。

(四五) フェビアン協會——フェビアン協會は、一八八三年イギリスに創立され、社會主義思想の宣傳を目的とす。資本主義社會は漸次的改良の道を通じて變更出来るといふ信念の下に、フェビアン協會は、その逡巡政策によつてローマの勝利を確保したローマの將軍ファビウス・コンクテーターの

名前をとつたのである。フェビアン協会員は、以前から社会發展の推進力としての階級闘争を排撃し、カール・マルクスの學説に反対した。最初、それは小ブルジョア急進派を支持した。一九一八年以來、専ら労働黨を支持してゐる。成員の少ないフェビアン協會（九〇〇——一〇〇〇人、主として知識階級）は以前から一個の宣傳俱樂部で、少しも政黨ではなかつた。

(四六)レギエン——全ドイツ労働組合同盟の會長、鮮明な改良主義者。一九二〇年に死す。

(四七)ユーデニッツ將軍——西北白衛軍の指揮官、レニングラードへの進軍の指導者たり。

(四八)デニキン將軍——南露における白衛軍の指揮官。

(四九)ゴンバース——世界における最も反動的な労働組合たるアメリカ労働總同盟の會長、彼は階級協調に留保なく味方し、あらゆる社会主義運動に反対し、獨立な労働者黨の建設に反対し、アムステルダム・インターナショナルすら革命的にすぎると考へてゐた。一九二五年に死す。

(五〇)ジューオー——戦前までアナルコ・シンジカリスト、戦時中熱心な愛國主義者となる。アムステルダム・インターナショナル指導者の一人。

(五一)ヘンダースン——イギリス労働黨の右翼指導者の一人、戦時中ロイド・ジョージ内閣に列す。

(五二)メルハイム——フランス労働總同盟(O.G.T.)のアナルコ・シンジカリズム系の指導者の一人、大戦の反對者で、チンメルワルド會議にすら参加した。戦後彼は充分首尾一貫せる階級闘争者

でなしことを曝露し、コンミンテルンに抗争し始め、改良主義に落つ。

(五三)メンセヴィーキ——ロシア社会民主黨内の日和見主義派。ロシア社会民主労働黨第二大會において、黨はレーニンの指導せる革命的多数派と日和見主義的小數派とに分裂した。これに應じて、レーニン派は多数派(ロシア語でボルセヴィーキ)と日和見主義派は小數派(ロシア語でメンセヴィーキ)と名づけられた。

(五四)ダニエル・デユ・ロン——I.W.W.創立者の一人(註五五を見よ)

(五五)I.W.W.——アメリカ労働者のシンシカリズム團體(註六五を見よ)

(五六)ズバトフ——モスクワ憲兵分隊長、一九〇三——一九〇四年に労働者協會を組織す、この協會は今日のファシスト團體を想はしめるものがあり、労働者の注意を専制主義に對する闘争から外らすを目的とした。

(五七)トリビューン——オランダ左翼社会民主主義者の機關紙、戦時中反軍國主義的宣傳を行ふ。

トリビュン派はチンメルワルド派に加盟し、ロシア十月革命後はソヴェート政府を擁護す。一九一九年コンミンテルンに加盟し、その機關紙はオランダ共産黨機關紙となつた。

(五八)アムステルダム労働組合インターナショナル——労働組合の國際的聯盟にて、アムステルダムにその事務局あり、第二インターナショナルの指導下に立つ。「黄色」といふ名前でレーニンは、ア

ムステルダム・インターナショナルの行ふ政策と、以前獨立な労働組合自身が「黄色」と呼んでゐた階級闘争を否定し産業平和政策を信奉する労働組合との、同一性を示してゐる。

(五九) フロツサル——フランス社会黨員、一九二〇年の分裂後、コンミンテルンに加盟したが、間もなく共産主義から遠ざかり、一九二三年フランス共産黨より除名さる。

(六〇) C.G.T (労働總同盟) フランスの労働組合團體、一九〇二年創立。一九一一年六〇萬人を數ふ、一九二〇年にはほぼ二〇〇萬人。戦時中その指導者は愛國主義的立場をとり、ブルジョアジーとの協調を宣傳し始めた。一九二一年一月革命的分子は改良的分子によりC.G.Tから追ひ出され獨立團體を組織した、統一労働同盟(C.G.T.U)がこれで、赤色労働組合インターナショナルに加盟す。

(六一) アルバート・トーマ——フランス社会黨最右翼指導者の一人。戦時中軍需大臣、現在國際聯盟労働事務局事務長——ビール・ルナウデル——愛國社会主義者、フランス社会黨最右翼指導者の一人。

(六二) 赤色労働組合インターナショナルの土臺石となつたのは、一九二一年六月モスクワにおいて、イギリス労働組合並にイタリー労働組合の使節員と全露労働組合中央評議會の代表者との協定であつた。

(六三) ロシア社会民主労働黨ストックホルム大會は、合同大會ともいはれ、一九〇六年四月に開催さる。この大會の任務は、二つの對抗的フラクションたるボルセヴィーキとメンセヴィーキと、またその當時また相互に分離して活動してゐたすべての民族的社會民主主義團體(ポーランド・リトアニア等)を一個の黨に結合することであつた。この黨大會において、メンセヴィーキは多數派たり、一般にその日和見主義的な、妥協政策で貫かれた決議が採用された。

(六四) ノヴァヤ・ジズニ(新生活)——二月革命と一〇月革命との間にベトログラードに發刊さる。この新聞は中央派メンセヴィーキ的な線を代表し、權力掌握ならびに社會主義的變革の問題においてボルセヴィーキに反對した。

(六五) サンジカリズム——主としてラテン諸國において見られる労働運動の潮流。サンチカリズムは労働者階級の政治闘争を否定し、プロレタリアートの政黨の必要、議會参加、社會主義實現のための政權の占領に反對す。サンチカリズムの認める唯一の而かも充分な階級組織形態は、労働組合であり、ゼネラルストライキを以て資本主義打倒社會主義樹立の手段と見る。全労働者階級と等しく、世界戦争中サンチカリズムも二派に分裂した。日和見主義的妥協的分派(ジュエーオー指導下のフランスのサンチカリストは裏切社會主義者と一寸も區別するところない)と革命的分派とがこれで、後者はさらに二つのグループに分る。一つは共産主義と革命的労働組合運動(譬へばスペインおよびフラン

スにおける)とに近づき、他は似而非革命的グループで、赤色労働組合、コミンテルン、ソヴェート獨裁に抗し、独自の謂ゆるベルリン・インターナショナルを創立した。後者は小数のドイツ、南アメリカ、その他のサンチカリストを抱擁す。

(六六)ピーター・スツルルーベ——九〇年代社會民主主義者、二〇世紀當初に自由主義に移る。一九〇五年の革命敗北後、スツルルーベは自由主義最右翼の指導者となり、終に極端な反動的國民主義におちつく。革命當時彼はデニキン將軍の白衛軍政府に参加し、後その後継者ウランゲルの大臣であつた。

(六七)立憲民主黨——略してカデット、また國民自由黨とも呼ぶ、一九〇五年一〇月成立、自由主義ブルジョアジの黨たり。大衆の壓力の下に、二月革命後カデットは共和國賛成を表明す。それは政府黨となり、その周圍にあらゆる反動分子を糾合す。コルニコフ將軍のベトログラード進軍を支持し、また一〇月革命に對するロシアならびに國際ブルジョアジの全闘争を支持す。

(六八)コルニコフ將軍——一九一七年八月、軍人および有産階級の反革命的陰謀の頭目たり。

(六九)ゴオスデュー——メンセヴィーキ、清算主義者、祖國防衛派の最右翼。ケレンスキー聯合内閣の一大臣の次官。ニキチン——メンセヴィーキ祖國防衛派、一九一七年夏の聯合内閣の大臣。ポロコボウイツチ——著述家、労働者運動の問題についての著あり、明白な日和見主義者。ツエムテリ

——メンセヴィーキ指導者、一九一七年革命においてのブルジョアジとの妥協政策の煽動者。

(七〇)ブリアン——もと社會主義者、八〇年代に熱心なゼネラルストライキの主張者たり。今世紀に入るや、裏切者となる。一九〇九年、大臣としての資格において全鐵道従業員に動員令を下して、フランスの鐵道従業員ストライキを敗北せしめた。戦後外務大臣、ソエヴェート同盟の最もはげしい反對者。

(七一)ベシエコノフ——カデット(註六七を見よ)と社會革命黨(註三六を見よ)との間を動搖し、大衆には少しの勢力ももつてゐないところの人民社會黨の指導者。ケレンスキー聯合内閣の一大臣。智識階級、小ブルジョアの典型的代表者。

(七二)チツ・オツーツネー——ロシア文學における一人物。ロシアでは資本家を名指すために用ひられる。



366.6
L54

3302

昭和
和和
二二
十一
一十
一年
年
年
四四
月月
十五
日日
再發
版行
刷

勞働組合論

定價二十圓

譯者 關東地方勞働組合協議會

東京都町區丸ノ内三ノ二(仲三樓第一號)

發行者 山内忠吉

東京都下谷區上野山下町二

印刷所 鐵道弘濟會東京印刷工場

配給元 日本出版配給株式會社

東京都町區丸ノ内三ノ二(仲三樓第一號)

發行所 永美書房

會員番號 A二〇四〇〇八



366.5
L54

